きっと、もっと、すてきな夢を咲かせます。

人間らしさをキーワードに、いま私たちの生活や社会には

本当の豊かさやゆとりが求められています。

日立は、どこまでも人にやさしい先端技術を通じて

そんな暮らしの夢をひとつひとつ花開かせ

豊かな実りをお届けします。

株式会社 日立製作所

日本協会新体制スタート

㈶日本ハンドボール協会では、男子世界選手権熊本大会終了に伴い、２月21日、評議員会の議を経て、３月15日、新役員の職務分掌を以下のように決定いたしましたのでお知らせいたします。

役職	氏名	職務分掌
名誉会長	斉藤英四郎	
会長	米倉　功	
副会長	渡邊　佳英	
副会長	中澤　重夫	
副会長	冨田　寛治	
専務理事	市原　則之	
常務理事	山下　泉	(日本リーグ)
常務理事	村松　誠	(総務)
常務理事	川上　憲太	(広報・企画)
常務理事	殿水　幸雄	(財務・会計・東アジア大会)
常務理事	喜井　美雄	(国際)
常務理事	大西　武三	(指導・普及)
常務理事	江成　元伸	(競技運営)
常務理事	斉藤　実	(審判)
常務理事	野田　清	(強化)

役職	氏名
理事	福地　賢介
理事	北岡　大覺
理事	佐分　正典
理事	金原　至
理事	井手　和洋
監事	大野　金一
監事	佐野　和夫
監事	竹野　奉昭
参事	駒林　昭三
参事	千田　文彦
参事	豊島　康彰
参事	秋永　昭治
参事	柳井　文治
参事	野中　聰
参事	山下　勝司
参事	真田　元
参事	近森　克彦

協会だより

平成10年度1月常務理事会

日　時　1月17日(土)
10時30分〜17時30分
場　所　東京体育館　第4研修室
出席者　専務理事、常務理事7名、参事1名、事務局2名、委任1名

1　日本協会60周年記念事業について

(1)記念パーティー開催について

1月31日開催の記念パーティーについて、場所、会費、記念品、出席者、及び進行表を検討。

感謝状、表彰状について50周年以降特段に功労のあった方に、感謝状を贈ること、そのために表彰委員会を設置することを決定。

男女ナショナルスタッフ、新任女子ナショナル監督及びコーチを紹介することとした。

記念誌の発行について報告。

2　全国高体連からの提案事項について

(1)平成10年度大会以降の高校選抜大会の開催について

平成10年度より、14年度の開催地について、平成10、11年度大阪府、平成12、13、14年度は富山県を了承。

全国高体連会議で正式決定しだい、要項を日本協会へ提出することを報告。

(2)平成10年度全国高体連の暫定ルールについて

新ルールに対し、原則として全国大会は国際ルールで実施が望ましいが、10年度については、経過措置として25分で実施することを含め、11年度より新ルールで実施するよう、日本協会と高体連で検討することとした。

3　平成10年度事業計画、事業予算審議について

平成10年度一般会計収入計画で、前年比マイナスとなり、厳しい状況であることを報告。

(1)普及関係事業費について

ディベロップメントチーム及びビーチハンドボールの普及事業について再度検討、従来の普及事業とあわせ見直しをする。

(2)競技専門委員会事業費について

(3)企画事業費について了承

(4)海外研修費について了承

(5)審判関係事業費について、レフェリー強化のため、強化部と日本リーグより費用負担する提案があり、これを受け入れ了承

(6)その他は申請通り了承

(7)強化部関連特別会計について

特別強化資金と一般会計（委託金＋自己負担金）で事業展開する報告あり。各ナショナルチーム別予算については、強化委員会で検討し決定するとの報告あり。

4　その他

(1)ワールドゲームズの概要について

2001年秋田県で開催されるワールドゲームズについて、競技種目としてビーチハンドボールが実施される可能性があり、日本協会としてビーチハンドボールの普及を推進することとした。

(2)選手強化事業について

マレーシアにハンドボール指導者を派遣する件について、2名を2月末から3月にかけて実施する計画を報告。

JOC認定のナショナル強化施設について、大同特殊鋼体育館を了承。

個人スポンサーに関する提案があり、取扱いについて検討することとなった。

女子ナショナルチームスタッフについて、監督に伊藤宏幸氏（日立栃木）を選任。コーチに韓国より黄慶泳氏を招聘、平成10年4月1日より平成11年3月31日まで採用することを了承。他の1名は監督が人選する。

(3)平成10年度組織について、意見が交わされ、1月31日、臨時全国理事会で意向をまとめ、評議員会へ具申できるよう申し合わせた。

訃報

関東ハンドボール協会会長、元日本ハンドボール協会常務理事　**清水　正氏**

かねてより病気療養中のところ平成10年3月8日(日)午前0時30分、亮年72才にて急逝いたしました。

ここに生前のご厚宜を深謝いたしますとともに、謹んでお知らせ申し上げます。

葬儀は10日(火)甲府市法泉寺にてとり行われました。

昭和36年山梨県ハンドボール協会から推され、日本ハンドボール協会理事に就任以来、平成7年まで役員を勤められました。平成9年秋に勲五等双光旭日章を受章された。

財団法人日本ハンドボール協会 平成10年度事業計画

平成10年度事業計画策定に当たり、現在の社会情勢から日本協会の財政状況を検討した。その結果、施策及び関係事業を下記のように策定した。

昨年開催された男子世界選手権大会が成功裏に終わり、本年度は新たな目標に向かって各種事業を展開していく。

昨年は男女ともに世界選手権大会に出場し、相応の成果を上げた。12月のアジア大会では、1999年開催の世界選手権大会の出場権をかけ、全力を尽くす。さらには、シドニーオリンピック出場に向け、継続した強化策の展開を図る。また、今後の選手強化の一環としてジュニア対策の強化も図る。

本年から実施される新競技規則の適用をにらみ、強化部門・競技部門と審判部門の調整、競技人口の拡充を図るために普及活動の充実・指導者育成、年間を通じて開催される各種大会の活性化等、日本協会を中心としてハンドボール界が総力を挙げて対応していかなければならない。

上記の目標を達成するために、以下の事業を展開する。

1 総務関係事業

●基本方針

国内事業の組織的対応の整備と充実

●重点施策

1、日本協会規定の整備・充実及びIHFを含む加盟団体との整合性の確立

2、組織体制の整備充実

加盟団体との調整を図る各種会議の開催

事務連絡体制の組織的対応

2 企画関係事業

●基本方針

各種事業計画の立案と実施へ向けての体制づくりの確立

●重点施策

1、ハンドボール界活性化に向け将来構想計画の立案と実施に向けての体制づくり

2、各種事業の計画立案

3 広報委員会関係事業

●基本方針

平成9年度に引き続き男女ナショナルチームのマスコミ、及び一般の人達へのPRをしていく。また、報道機関との連携を図り、ハンドボールの露出度を高めていくための、方策と情報収集を目指していく。

●重点施策

1、ナショナルチーム関連のプレスリリースの充実

2、マスコミとの交流会の実施

3、情報収集の充実

(機関誌委員会関係)

●基本方針

登録チーム及び読者に対して、日本協会の動き、考え方などを正確に伝え、日本協会施策について啓蒙を図る。

また、記録性も重視し、各種主催大会、表彰、なども取り上げていく。さらに、見やすくするために、写真等も計画的に掲載できる様配慮する。

●重点施策

1、委員会活動の活性化

委員の作業分担を明確化し、スムーズな編集を目指す。

2、情報の伝達

各委員会・連盟よりの情報を積極的に掲載して行く。

3、視覚に訴える誌面作り

4 財務委員会関係事業

●基本方針

'97年男子世界選手権大会での成功、盛り上がりの勢いを生かしてゆく為に重点的な財源の配分が必要であり、特にシドニーオリンピック出場を目指す強化部門、競技人口の増加、ファン作りの為の普及、情宣・広報活動に力を入れたい。

◎収入面より：強化部門については日本リーグ加盟各企業より強化特別登録金の協力を得る。

・事業部門の収入強化を企画・検討する。

・登録金の引き上げについて検討する。

◎支出：協会事務のOA化をより一層進める。

・ビーチハンドボールを含め普及活動に力を入れる。

5 国際委員会関係事業

1、第15回男子世界選手権大会(日本開催)、及び第13回女子世界選手権大会(ドイツ開催)は多くの皆様のご協力を得て、無事終了致しました。

今後は、本年12月のタイ・バ

ンコクでのアジア大会で同時開催される、第16回男子世界選手権大会（エジプト開催）と、第14回女子世界選手権大会（ノルウェー開催）、また、8月にバーレーンで開催される男子ジュニアの世界選手権の予選（女子は未定）の各予選会のサポート。

2、2000年のシドニーオリンピックのアジア予選の日本開催について、特に男子の予選はその重要性から蒲生監督以下現場の熱望するところであり、開催にこぎつけたい。

　ソウル（ヨルダン）＝西・バルセロナ（日本・広島）＝東・アトランタ（クウェート）＝西、とすれば今回は東開催、日本は2度目で難しい部分もあるが、熊本の世界選手権大会のメモリアル大会としての熊本開催は提案しやすい。

　現在AHF（アジアハンドボール連盟）打診中。

6 指導委員会関係事業

●基本方針

1、指導者の育成
(1)C(B)級コーチ養成講習会の開催
(2)コーチレフェリーシンポジュウムの開催
(3)長期的展望にたった指導者育成計画の作成
(4)指導組織の整備
(5)研修制度の確立
(6)大学におけるC級コーチ専門教科認定コースの設置について
(7)都道府県におけるスポーツ（ハンドボール）指導員の養成

2、公認コーチ資格の義務づけ制度について

3、ビデオ教材の開発

4、海外派遣による研修と情報収集

5、全国指導者委員会の開催

6、指導体制の一貫化方策

●重点施策

1、指導者の養成システムの開発
　公認コーチ・スポーツ指導員養成の長期計画
　指導者の公認資格義務づけの計画

2、公認コーチ・スポーツ指導員養成講習会

3、指導担当者の連携
　日本協会指導専門委員会―ブロック委員長―都道府県担当者
　指導担当者と公認指導者との連携

4、研修制度の確立
　指導者の資質向上の為の研修制度及び義務研修制度

5、平成10年度コーチレフェリーシンポジュウムの開催

7 普及委員会関係事業

●基本方針

1、普及対策の確立
(1)ディベロップメントチームのモデル事業
(2)郡市町村ハンドボール協会の設立促進
(3)ジュニア（小学生を中心として）チーム育成
　市町村協会でのスポーツ教室開催
　チーム創設マニュアル
(4)小学校の指導要領へのハンドボールの導入施策
(5)中学生委員会関係
　JOCジュニアオリンピック大会の活性化
　全チームの登録達成
　生徒数減にともなうチーム数減の歯止め
(6)ビーチハンドボールの普及
　ワールドゲーム2001（秋田）をきっかけとして
(7)マスターハンドボールの普及

●重点施策

1、ディベロップメントチームのモデル事業

2、小学生指導要領の改定に向けて、文部省に働きかける資料の作成と働きかけ
　研究事業の促進、ハンドボールのPR、研究発表

3、小学校から老人まで、健常者から障害者まであらゆる指向の人が生涯ハンドボールを行える基盤の確立
　小学生チームの育成
　マスターハンドボールの位置づけ
　ビーチハンドボールの普及
（障害者のハンドボール）

4、中学生関係
　JOC大会の充実

8 審判委員会関係事業

●基本方針

1、上級審判員の審査

2、審判員の資質向上
　特に、資質向上は審判委員会の永遠の課題であるが、本年度は熊本世界選手権大会での、エリート・レフェリー達のパフォーマンス・考え方にどれだけ近づく事が出来るか研修させたい。

3、審判委員会の運営

●重点施策

1、JHAレフェリー・コーチ・シンポジュウム
　多くのレフェリー・コーチが熊本世界選手権大会を観戦したが、日本のハンドボールをどのような方向にもってゆくのか、その方向性をさぐる。

2、トップレフェリー研修会
　全国各ブロックのトップレフェリーを集め、ナショナルの合宿で寝食をともにし、強化委員会のメンバーと判定とレフェリングについて話し合う。

3、JHAレフェリー・コース
　トップ・レフェリーのクリニックとともに、レフェリーの底上げをねらい、将来のトップレフェリーの育成をはかる。

9 競技専門委員会

●基本方針

要望：ハンドボール界、待望の競技専門委員会が出来たが次年度には、是非競技委員会（COC）を確立してほしい。

予算は暫定であり、次期委員長の考えが入る余地を残してほしい。

本年度の目標：組織の確立

現在、各ブロック・各連盟と委員長指名（数名）で活動する。

●重点施策

重点目標

1、懲罰規程
・現在、審判員や記録員に対する暴力的・侮辱行為に対する規程がないので早急に確立する。

2、競技用具の検定

3、競技会の管理者
・マッチ・スーパーバイザー・立会人制度の確立

4、全日本総合のあり方等

10 強化関係事業

●基本方針

1、第13回アジア競技大会（バンコク）での目標を達成するため

の強化策を協力に推進する。

目標・男子　金メダル

　　　女子　銀メダル

2、第15回男子・第3回女子学生世界選手権大会の上位入賞（目標・前回大会以上）を果たすための強化策を実施する。

3、第6回アジアJr.選手権大会（男女）の上位入賞と世界選手権大会の出場権を獲得するための強化策を実施する。

4、2000年・2004年、オリンピック大会のための長期強化計画を立案し、それに基づき諸強化施策を実施する。

ア、各ナショナルチームの一貫した指導体制の充実

イ、ナショナル選手所属チームとの選手強化に関する連携の緊密化

ウ、特別強化費の効果的な活用

●重点施策

1、平成10年度チーム事業推進計画に基づき計画的に強化策を実施する。

2、男女ナショナルチームへ外国人コーチを招聘し、チーム強化を強力に推進する。

3、国際大会（国内・外）で優秀な成績をあげるために国内・外の強化合宿、海外遠征などを計画的に実施する。

4、スポーツ医科学委員会との連携強化

ア、ナショナル選手総合力アップ施策の推進

イ、ナショナル選手総合健康管理体制の充実

ウ、アンチドーピング体制の整備と強化

5、強化関連部門との連携

11 スポーツ医科学委員会関係事業

●基本方針

NA男・女選手及びジュニア選手の体力、健康水準の向上、傷病の改造をはかるため、スポーツ科学研究と特別強化（スポーツ医学研究）に区分する。

スポーツ科学は、体力つくりの普及徹底ならびに栄養摂取、体脂肪、骨密度の現状の改善策を現場進出で具現する。

特別強化は、NA男女選手のトップコンディショニングに不可欠なメディカルチェック・体力測定、チーム帯同（海外試合、合宿、国内大会）を継続するとともに、JOC・日体協のアンチドーピングの重点施策助成事業としてハンドボール競技としての普及、テストを実施する。

●重点施策

1、スポーツ科学

（1）NA男・女選手及びジュニア選手の体力つくりを「コンディショニングマニュアル」を（平成8年度作成）及び徹底普及し、NA男子体重90kg水準に適応した筋力、全身持久力を向上するとともにNA女子総合体力を向上するための個人メニューのフィードバックを重視する。

（2）これがため、スピード持続能力トレーニング方法の継続実施、所属チームにおける栄養摂取、骨密度・体脂肪測定を実施する。

（3）日体協・JOCと連携してメンタルマネージメントを調査実施する。

2、特別強化（スポーツ医科）

（1）NA男女選手のトップコンディショニングをはかるため、メディカルチェック・体力測定、メンタルトレーニングを継続実施する。

（2）JOC、日体協のアンチドーピングの事業に対応するとともに平成10・11年度はNA男女役員・選手及び指導者の知識・能力向上のため、主要競技会に（全日本実業団、全日本総合）においてドーピングテストを実施する。

12 日本リーグ運営委員会関係事業

●基本方針

1、日本リーグ運営方法の見直しと運営機構の再構築（独立法人化の為の積立金）

2、リーグ理念の具現化に向け組織の強化

3、女子リーグの24回大会からの1リーグ化の実現

4、日本リーグ広報活動に日本協会との協調体制を敷くこと

5、日本リーグの専門誌の発刊の検討（PR不足の補填）

6、ホームアンドアウェイの活性化義務づけによるファン動員対策と第3地区への積極的な進出

7、リーグ優勝チーム及び優秀選手への賞金制度の検討

8、ドーピングテストの採用（プレーオフ）

●重点施策

1、リーグ・スケジュールの定着化と開催期間の短縮

2、報道センターの設立（リーグ速報の効率化）

3、男子2部リーグの10チームでの運営（2チーム増で地域分割）

4、リーグチームの自己PRの為の積極的な情報発信の推進

5、東西対抗・オールスター戦の定期的開催と開催地の公募（期の前半で検討）

6、海外研修制度の継続実施（3名）と研修員の運営委員・審判・監督からの選出

7、リーグ・スター選手の育成

1998年度　国内大会日程

月	大　会　名	開催日程	開催地	開催場所
4月				
5月	高松宮杯　第39回全日本実業団選手権大会・男子	5月1日～4日	大阪府	守口市体育館
	高松宮杯　第39回全日本実業団選手権大会・女子	5月14日～17日	愛知県	愛知県体育館
6月				
7月	第11回全国小学生大会（予定）	7月31日～8月2日	京都府	田辺市中央体育館
	第18回全国クラブ選手権大会（東）	7月24日～26日	福島県	本宮町総合体育館
	第18回全国クラブ選手権大会（西）	7月10日～12日	高知県	高知市民体育館
8月	第49回全国高校選手権大会	8月1日～8日	徳島県	市立体育館
	第41回全日本教職員大会	8月10日～13日	福島県	石川町総合体育館
	第25回全国高等専門学校選手権大会	8月1日～2日	東京都	駒沢体育館
	第3回ジャパンオープントーナメント	8月6日～9日	熊本県	山鹿市総合体育館
	第27回全国中学校大会	8月18日～21日	宮城県	仙台市体育館
9月	第23回日本リーグ（前期）	9月29日～10月19日	各地	
10月	第53回国民体育大会	10月25日～29日	神奈川県	横浜文化体育館　他
11月	高松宮杯　男子41回女子34回全日本学生選手権	11月18日～22日	愛知県	愛知県体育館　他
	'98ジャパンカップ	11月22日～25日	未定	
12月	第50回全日本総合選手権大会	12月23日～26日	兵庫県	神戸グリーンアリーナ
	JOCジュニアオリンピックカップ	12月25日～27日	大阪府	
1月	第23回日本リーグ（後期）	1月9日～3月14日	各地	
2月	全日本実業団チャレンジ99	2月13日～15日	山口県	
	第5回西日本小学生大会	2月13・14日	岡山県	
3月	第23回日本リーグプレイオフ	3月19日～22日	未定	
	第22回全国高校選抜大会	3月24日～28日	未定	

1998年～1999年　国際大会日程

月	大　会　名	開催日程	開催場所
98年　4月			
5月			
6月	第3回女子世界学生選手権	6月7日～26日	ポーランド
7月又8月	第6回アジア女子Jr選手権兼1999世界選手権予選	未定	東アジア地区
7月	コパ・インテラムニア	7月4日～9日	イタリア
	第4回ヒロシマ国際大会	7月23日～26日	広島
8月	第6回アジア男子Jr選手権兼1999世界選手権予選	8月25日～9月10日	バーレーン
9月			
10月	第2回アジアクラブリーグ選手権	未定	ヨルダン
11月			
12月	第13回アジア競技大会兼1999世界選手権予選	12月7日～18日	バンコク
	第15回男子世界学生選手権	12月30日～1月7日	ユーゴ
99年　1月			
2月			
3月			
4月	第7回女子アジア選手権兼2001世界選手権予選	未定	未定
5月	第16回男子世界選手権大会	5月23日～6月6日	エジプト
6月			
7月	コパ・インテラムニア	7月4日～11日	イタリア
8月	第12回女子Jr世界選手権	8月1日～15日	中国
	第12回男子Jr世界選手権	8月22日～9月5日	カタール
9月			
10月			
11月			
12月	第14回女子世界選手権大会	12月5日～19日	ノルウェー

（IHFカレンダーより）

第22回日本ハンドボールリーグを終えて

日本リーグ運営委員長（常務理事）　山下　泉

昨秋、９月17日からスタートした日本リーグ、３月１日に駒沢体育館で行われた「ＡＮＡ ＣＵＰプレーオフ」男女決勝戦をもって無事全日程を終えることが出来ました。これも多くのハンドボールファンをはじめ、運営に携わった開催地協会の方々や審判団、そしてチーム関係者のご協力のお陰であり厚くお礼申し上げます。

特に第22回リーグは、すばらしい感動と興奮を与えてくれた熊本世界選手権後、全国に盛り上がった熱い思いを冷まさない為にも大きな責任と使命を課せられた大会であった。結果は十分とは言えないまでもハンドの魅力であるスピード、パワー、テクニックを駆使した「コンタクトスポーツ」として確実にファンが増加しており、マスコミもリーグを取り上げる機会が多くなってきている。

リーグの最終イベントであるプレーオフは今年からＡＮＡ（全日空）の特別協賛のご支援を頂き「ＡＮＡ ＣＵＰ」の冠大会となった。昨年に続いて寛仁親王妃信子殿下のご観戦を仰ぎ、熊本で使用したタラフレックスコートと熊本ドームの会場アナウンサーを担当したユミ・ガットシーさんを起用、又、審判レベルの向上を掲げる日本リーグ、今年も世界のトップレフェリーであるクロアチアのペアを招聘した。決勝戦は朝からの猛吹雪にも拘らず１５００人の観客に満足のいくゲームをお見せ出来たと思います。大会前の記者発表で各監督とも世界レベルを視野に入れたトレーニング法、食事対策、確率を重視した戦略をもって臨んでいたことは昨年と違っていた。明らかに世界選手権の効果が実りつつあると感じた。

男子決勝戦は湧永製薬×本田技研となり、プレーオフ史上に残る死闘といえる熱戦で、延長戦でも決着がつかず、２点連取のＶゴール方式の第２延長となった。結果は湧永が５年振りの優勝を飾った。準優勝の本田技研鈴鹿の若手の頑張りは日本ハンドの明日に大きな期待を抱かせるゲーム内容であった。女子で２年振り10回目の優勝を飾ったオムロンは、優勝経験を生かし、沖縄合宿の成果で北国銀行に競り勝った。

第23回大会はリーグのマンネリ化した運営方法を見直し、21世紀に向けてどうあるべきかを再考し大きく転換する必要がある。早急にチーム間の温度差を解消し、リーグに参加している全チームが一丸となって繁栄を目指さなければならない。日本リーグの理念にあるように、リーグがレベルアップすることは、確実にシドニーオリンピックに繋がることを念頭に置いて、活性化に取り組みたい。今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。

第22回日本リーグ

プレイオフ、熱戦のすべて

【1部男子】

■2月28日(土)/駒沢体育館

本田技研 22 (14－9 | 8－12) 21 大同特殊鋼

大同スローオフで始まった前半、藤井が開始早々先制シュートを決める。本田も移籍セルゲイが鋭いシュートで同点にすると荒木、新人斉藤と連打で2点リード、更に新人池辺のシュートで3点リード。大同は6分過ぎ柴田のサイドシュートが決まるが末岡の7MTを本田の守護神橋本に止められペースにのれず。12分過ぎようやく大砲林、藤井のシュートで5－6と詰め寄るが、本田は斉藤、荒木、セルゲイの3連打で突き放す。大同も林、新人市原らの粘りで2点差とするも本田も池辺、茅場、セルゲイの連打で14－9で折り返す。

後半、大同は2分過ぎ、末岡、林の連打、8分過ぎに松本の7MTを皮切りに冨本、林の4連取で16－17と肉薄するが本田はセルゲイが2本の7MT、更に大同GK秋吉に7MTを阻止され林、柴田、冨本の気力のこめたシュートが決まり21－22と詰め寄るも終了間際のノータイムスローは惜しくも本田のDFにはじかれタイムアップとなった。

［本田技研］番号	氏名	得点	［大同特殊鋼］得点	氏名	番号
5	茅場	1	0	秋吉	1
7	斉藤	3	0	佐藤	2
8	加藤	2	5	冨本	4
10	広政	2	1	市原	7
11	平松	1	2	藤井	8
12	橋本	0	8	林	9
14	荒木	3	2	末岡	10
16	四方	0	0	米倉	11
17	日原	0	2	柴田	14
18	池辺	2	1	松本	15
19	羽賀	0	0	日原	16
20	SERGUEI	8	0	南川	18
	計	22	21	計	

大同特殊鋼 No.4 冨本のロングシュート

■3月1日(日)/駒沢体育館

湧永製薬 26 (9－12 | 10－7 | 1－1 | 2－2 | 4－2) 24 本田技研

湧永製薬のスローオフで試合開始。10分、湧永の3－2とロースコアの展開となるが、中盤から本田は堅い守りと茅場の3本のロングなどで25分までに9連続得点で11－5の6点差とした。その後、湧永山口がラフプレーで一発失格となるが湧永も盛り返し、前半は本田の12－9で折り返した。

後半に入り、本田が2連取するも、湧永はGK坪根の好セーブ、パワープレー、速攻などで徐々に追い上げ、後半15分、17－17の同点に追いついた。その後、両チーム守り合い、お互いに2点を追加し、プレーオフ初の延長戦に突入した。

第一延長に入っても両チーム譲らず、互いに3点を取り、2点連取のサドンデス方式による第二延長戦となった。

第二延長は、息づまる攻防の中、お互いの攻めで点を取り合い、アドバンテージの連続となったが、最後は、5分50秒、湧永の3回目のアドバンテージを森山が速攻で決め、湧永の5年ぶり8度目の優勝が決まった。MVPは再三好セーブを見せたGK坪根が獲得した。

［湧永製薬］番号	氏名	得点	［本田技研］得点	氏名	番号
1	多田	0	9	茅場	5
2	森山	7	3	斉藤	7
5	堀田	1	3	加藤	8
6	山口	1	4	広政	10
7	中山	4	0	平松	11
8	ブラマニス	8	0	橋本	12
11	高田	2	1	荒木	14
12	坪根	0	0	四方	16
13	小沢	1	0	日原	17
14	田中	0	2	池辺	18
15	杉山	2	0	羽賀	19
17	浜本	0	2	SERGUEI	20
	計	26	24	計	

湧永製薬 No.7 中山剛のシュート

【1部女子】

■2月28日(土)/駒沢体育館

オムロン 23 (10－12 | 13－10) 22 日立栃木

オムロンのスローオフで開始。日立は立ち上がりオムロンのDFのスキをついて松本、沖土居、白の3連取で3－0とリード。オムロンは6分過ぎ7MTを外したが

［オムロン］番号	氏名	得点	［日立栃木］得点	氏名	番号
1	山口	0	0	藤井	1
2	杉原	1	0	伊佐野	3
3	田村	2	2	ワン	5
5	田野	0	9	ペク	7
6	宮本	3	6	松本	10
7	田中	0	0	中村	11
8	高橋	6	0	渡邉	12
9	後藤	2	0	面	13
13	川崎	0	0	中山	14
16	王	0	5	沖土居	15
18	林	3	0	今野	16
20	石	6	0	楠本	17
	計	23	22	計	

8分過ぎ田村のサイドシュートでようやく1点を返す。日立・白にマークがつき日立は松本がミドルシュートで踏んばるが15分過ぎオムロンも高橋、石の連打で追い上げ23分過ぎ高橋のシュートで8－8の同点に。日立はタイムアウトを取った後、王の2連取、オムロンも後藤、高橋の連打で再び同点に。残り2分、日立は松本のロング等で再び2点リードで折り返す。

後半、オムロンは3分過ぎ、高橋、石、林の3連打で14－13と逆転、さらに日立の7MTミスをついて杉原、高橋の連打で2点リード。日立もキャプテン沖土居、白らの連打で17－17の同点から逆転するがオムロンも石のロングで再び同点に。残り3秒高橋が決勝打を決めて勝った。

オムロン 高橋のシュート

■3月1日(日)／駒沢体育館

オムロン 25（15－12、10－9）21 北国銀行

北国銀行のスローオフで試合開始。両チームやや固い立ち上がりの中、北国上出、オムロン高橋などの得点で、前半17分8－8と一進一退の攻防となる。その後、オムロンは、石の3連取などで、徐々に点差を開き、15－12の3点差で前半を終了する。

後半に入り、北国はオムロン石にマンツー、攻めては、上出、和田の得点などで5連取し、5分30秒、16－15と逆転をする。対するオムロンは、チームタイムアウト後に体勢を立て直し、7分55秒に後半初得点をあげると、田村、高橋などで、4連取し再逆転した。その後、オムロンは、立て続けに退場者を出すが、一人少ない状態で得点を重ね、GK山口の要所での好セーブもあり、20分、22－18と4点差とし、その後もこの点差をキープし、25－21で勝利した。オムロンは2年ぶり10回目の優勝、MVPには山口が選ばれた。北国銀行は、2年前のプレーオフと同様、オムロンに敗れ、悲願の初優勝はならなかった。

番号	氏名	得点	得点	氏名	番号
[オムロン]			[北国銀行]		
1	山口	0	0	沖園	1
2	杉原	3	10	上出	2
3	田村	5	2	田中	3
5	田野	0	1	小松	5
6	宮本	3	0	益田	6
7	田中	0	2	中村	8
8	高橋	4	0	岡田	9
9	後藤	4	2	和田	10
13	川崎	0	4	田中	11
16	王	0	0	安田	12
18	林	2	0	桶	13
20	石	4	0	斉藤	15
	計	25	21	計	

北國銀行 No.8 中村のカットイン

1部2部 入替戦

【2部男子】

■2月27日(金)／駒沢体育館

大崎電気 25（13－10、12－11）21 本田技研熊本

大崎のスローオフにより前半開始。2分過ぎ大崎魚住が先制点を奪うと本田熊本も4分過ぎ西村の得点で追いつく。その後一進一退のゲーム展開となるが、大崎は9分過ぎ森本、土屋の2連取で流れをつかみ、18分過ぎにも小野、魚住の連取で11－6とリードを広げる。本熊の残り1分キャプテン川勝のサイドシュート、米満の得点で追い上げ3点ビハインドで折り返す。

後半立ち上がり本熊は清水のポストシュートで11－13と2点差とするが両チーム点の取り合いとなる。大崎は5分過ぎ森本の2連打、佐藤の得点で5点リードするが不正入場で4人の守りとなり本熊の連取を許すが、GK佐藤が7MT阻止で意地を見せ近藤、土屋らの活躍で逃げ切った。

■2月28日(土)／駒沢体育館

大崎電気 26（15－7、11－9）16 本田技研熊本

大崎のスローオフで前半開始、本熊は立ち上がり佐伯、花岡の連取で2－0とするが大崎も首藤の2連取で同点に。本熊も早いパス回しから田中、川勝の得点でリードするが大崎は11分過ぎタイムアウトから森脇の7MTを足がかりに9連取の猛攻で一方的になり本熊もたまらずタイムアウトを取る。その後本熊田中のロングシュートで一矢を報いるが大崎の勢いは止まらず、15－7と大崎8点リードで折り返す。

後半立ち上がり一進一退のゲーム展開で両チーム激しい攻め合いとなる。14分過ぎ大崎は森脇、近藤らの速攻で21－13とする。本熊も佐伯のあざやかなサイドシュートで流れを断ち切るも大崎の勢いは止まらず26－16で本熊を下し、1部残留を決めた。

【2部女子】

■2月27日(金)／駒沢体育館

立山アルミ 25（9－7、16－8）15 ブラザー工業

どのチームに聞いてもやりたくない試合と言われる入替戦。重苦しい雰囲気のなか、立山アルミのスローオフで試合開始。応援団は両チームとも僅かな人数ながら気迫はすごい。1部・2部それぞれの立場でのプレッシャーを浴びて、全ての選手はガチガチ状態で先取点は2分25秒、立山柳の7MTによるもの。一進一退のあと、前半7－9として2点を追うブラザーは、後半はじめ冨江の速攻3連発で10－11と迫るものの、立山の攻撃を守りきれず、あっけない失点を続けて差は開く。残り15分、柳のロングで12－16となったところで、ブラザーがタイムアウト。最後の追いこみと崔にマンツーを仕掛けるも、これが裏目となり、以後柳と崔の猛攻を受け10点差の完敗となった。

立山、柳4／12、崔7／15と韓国コンビのここ一番の信頼感は素晴らしく、得点にからむ執念は鬼気迫るものがあった。ブラザーは裕、菅谷などパワーでは勝っているもののディフェンスに迫力を欠き、ズルズルと沈んでいった。

明日に向かって10点の差は重い！

■2月28日(土)／駒沢体育館

立山アルミ 30（16－12 / 14－8）20 ブラザー工業

ブラザーのスローオフで前半開始。開始34秒、立山主砲崔のシュートで1－0とするもブラザーも1分過ぎ、新人長谷川のシュートが決まり同点に。その後、立山が先にリードし、ブラザーが追いつくゲーム展開となるが、中盤ブラザーは崔にマークをつけ、菅谷の7MT、滝川の連取で同点とするも、19分過ぎ立山は7MTを3本とも決め16－12で折り返す。

後半立ち上がり、両チーム速攻中心の攻め合いとなり、立山は嶋田、崔の3連取で勢いにのるが崔、柳の2人マンツーにつかれ、ブラザーも長谷川のミドルなどで反撃するも16分過ぎに立山は7MTを含む4連取でリードを広げる。ブラザーGK太田の好守もあるが、立山は26分過ぎ山崎、前山の3連取で30－19とするが、残り1秒長谷川がシュートを決めるも20－30でタイムアップとなる。

2点連取方式サドンデスマッチについて

日本リーグ副委員長
第22回日本リーグプレーオフ実行委員長
稲住　晋二

日本ハンドボールリーグ運営規程の「日本ハンドボールリーグ競技運営に関する細則」のなかの、「11　競技時間……男女とも、30分ハーフ　ハーフタイムは10分とする。

各チームは、前・後半各1回1分の作戦タイムを取ることができる。尚、詳しくは競技ルールによる。

同点の場合の延長戦は行わず引分けとする。但し、プレーオフに限り同点の場合、第1延長戦ののち2点連取制のサドンデス方式を適用する。(改訂：1992／4)」

この前記の規程が、第22回日本リーグ・プレーオフ男子決勝「湧永製薬対本田技研」の試合を歴史に残る名勝負にしてしまった。

試合は両者ゆずらず延長戦にもつれこみ、延長の10分間3点ずつを取り合って、決着つかず、初めての2点連取サドンデス方式の第2延長に……。

〈2点連取サドンデス方式による延長戦の細部〉

◆1分／本田⑧加藤
センターからジャンプシュート。
DF－GKにタッチ、得点ならず。

◆1分33秒／湧永23点目／湧永②森山
中山からパスを受けセンター－8m付近からジャンプシュート。(右中段)

◆2分30秒／本田23点目／本田⑧加藤
茅場からのリターンパスを受け中央からカットイン、ブラマニスと杉山の間を抜いて飛び込み。(右下)

◆3分42秒／湧永24点目／湧永⑧ブラマニス
森山のカットインを羽賀・斉藤で挟んでエリア内防御となる。7MT成功(左耳のそばを通過)

◆4分41秒／本田24点目／本田⑤茅場
加藤のパスをもらってワンドリブル。中央9mからジャンプシュート。(右下)

◆5分16秒／湧永25点目／湧永⑧ブラマニス
中山－森山とわたったパスを受け右45度から左45度に流れジャンプシュート。(右の下・ワンバウンド)

◆5分53秒／湧永26点目／湧永②森山
マイボールから速攻に飛び出し、ブラマニスからのパスをもらってワンステップでエリア内にジャンプ、ノーマークでシュート。(右下)

(注：前記したのは時間・得点・得点者・シュート形態)

〈決勝打になった場面の詳細〉

(1)サドンデス5分16秒、ブラマニスの回り込みシュート成功で、湧永にアドバンテージ。

(2)本田のセットでの攻撃で、本田が早いパス回し。

(3)本田の左45度⑦斉藤がボールを受け、つっこんでジャンプシュートを打つふりをして、ポストにパスをねらう。

(4)ところで、ポストをマークしていた杉山とブラマニスが自分に当たりにこずにポストから離れないので、サイドにパスをしようとしたが、味方選手は遠くサイドで守っていた湧永⑤堀田の胸に……。

(5)キャッチした堀田は素早くブラマニスにパスして右ライン際を攻めあがる。ドリブルで持ち込むブラマニス、左45度の位置で本田ディフェンスの前を走る②森山へパス。

(6)場内騒然とする中、ほぼノーマークの森山、ワンステップでエリア内にジャンプしてノーマークでシュート！

(7)本田GK⑫橋本、思いっきり飛んでシャットアウトをねらうが、空中で森山と激突！ボールはワンバウンドでゴールネットを揺らす。

森山と橋本は転倒。森山のそばにブラマニスと堀田が駆け寄って転がる……。

(8)湧永、歓喜の嵐……。

これに関しては異論をとなえる人がいるかも知れないが、日本リーグの決着をつけるにふさわしいものだったと結果論からであっても、そのように認められることを期待したい。

優勝が決まった湧永のベンチの様子

日本リーグプレーオフ　出場チームのプレーオフでの過去の成績

<男　子>

		第17回	第18回	第19回	第20回	第21回	第22回	合計	通算成績
湧　永	得点	25	18		29　16	19	26	133得点	
	結果	☆　○　1	☆　●　1		○　●　2	●　3	☆　○　1		出場5回
	失点	21　↓	23　↓		19　27　↓	21　↓	24　↓	135失点	3勝3敗
	相手	日新　①	日新　②		日新　中村　②	中村　③	本田　①		優勝2回
日　新	得点	25　21	27　23	30	19			145得点	
	結果	○　●　2	○　○　2	●　3	●　3				出場4回
	失点	17　25　↓	22　18　↓	37　↓	29　↓			148失点	3勝3敗
	相手	本田　湧永　②	本田　湧永　①	中村　③	湧永　③				優勝1回
本　田	得点	17	22				22　24	85得点	
	結果	●　3	●　3				○　●　2		出場3回
	失点	25　↓	27　↓				21　26　↓	99失点	1勝3敗
	相手	日新　③	日新　③				大同　湧永　②		優勝なし
中　村	得点			37　25	27	21　18		128得点	
	結果			○　○　2	☆　○　1	○　●　2			出場3回
	失点			30　14　↓	16　↓	19　20　↓		99失点	4勝1敗
	相手			日新　大同　①	湧永　①	湧永　大同　②			優勝2回
大　同	得点			14		20	21	55得点	
	結果			☆　●　1		☆　○　1	●　3		出場3回
	失点			25　↓		18　↓	22　↓	65失点	1勝2敗
	相手			中村　②		中村　①	本田　③		優勝1回

<女　子>

		第17回	第18回	第19回	第20回	第21回	第22回	合計	通算成績
北　国	得点			17	18	19	21	75得点	
	結果			●　3	☆　●　1	●　3	☆　●　1		出場4回
	失点			21　↓	20　↓	28　↓	25　↓	94失点	0勝4敗
	相手			オムロン　③	オムロン　②	日立　③	オムロン　②		優勝なし
オムロン	得点			21　20	25　20		23　25	134得点	
	結果			○　●　2	○　○　2		○　○　2		出場3回
	失点			17　31　↓	12　18　↓		22　21　↓	121失点	5勝1敗
	相手			北国　大崎　②	イズミ　北国　①		日立　北国　①		優勝2回
大　崎	得点			31				31得点	
	結果			☆　○　1					出場1回
	失点			20　↓				20失点	1勝0敗
	相手			オムロン　①					優勝1回
イズミ	得点				12	28		40得点	
	結果				●　3	☆　○　1			出場2回
	失点				25　↓	24　↓		49失点	1勝1敗
	相手				オムロン　③	日立　①			優勝1回
日　立	得点					28　24	22	74得点	
	結果					○　●　2	●　3		出場2回
	失点					19　28　↓	23　↓	70失点	1勝2敗
	相手					北国　イズミ　②	オムロン　③		優勝なし

☆印は準決勝不戦勝をあらわす　　○囲み数字は最終順位をあらわす　　2→②は、レギュラーシーズンとプレーオフの成績をあらわす

喜びの声

■男子優勝監督

湧永製薬ハンドボール部　河原　隆雅

第22回日本リーグを5年振り8度目の優勝を飾ることができ大変うれしく思っています。各チームの力が均衡している中、苦しい試合の連続ではありましたが、僅差の試合に勝てたことにより、選手ひとり一人が自信を持ち、また逞しくもなったことにより、リーグ戦を戦っていく中でチーム力をアップすることができました。また試合欠場につながる怪我人もなく、ほぼフルメンバーで戦い抜けたことがリーグ1位通過につながったと思います。プレーオフ決勝においても、レギュラーシーズン同様に前半から苦しい試合展開ではありましたが、正規の60分延長10分でも決着がつかず、日本リーグプレーオフ特別ルールの2点連取サドンデス方式による第二延長に突入しましたが、最後の最後まで集中力を欠くことなく非常に良い試合ができました。

今後は、この日本一を継続できるよう更に精進していきたいと考えています。

最後になりましたが、沢山の方に応援して頂き心から感謝申し上げ優勝報告とします。

湧永チーム応援団

■男子最高殊勲選手

坪根　敏宏

日本リーグプレーオフ決勝戦の最高の試合で、私自身の持っている力を発揮することができ、またチームに貢献でき優勝することができたことに大変満足しています。そして最高殊勲選手賞という名誉ある賞までいただき感激していますが、試合直後の表彰式であったためまだ呆然としており、優勝の実感や最高殊勲選手賞で自分の名前が呼ばれた時も何かわからず、気づくのに時間がかかりましたが、この賞を誇ることなく、より一層の精進を重ね、素晴らしいプレーをファンの方に見せれるよう頑張ります。

■女子優勝監督

オムロンハンドボール部　西窪　勝広

97年度ハンドボールカレンダーの最後の最後のプレイオフ大会で優勝でき今は安堵感で一杯です。

レギュラーシーズン終了後の1ケ月間は選手達にとっては大変厳しい内容の練習だったと思います。ボールを一切使わない下半身強化の為の基礎トレーニングから始まり、中旬の沖縄合宿では高校男子との実戦面の強化試合、そして基本的なパス・キャッチの反復練習と本当に精神的・体力的にも大変ハードな練習内容を選手達がよく目的を理解して練習に取り組んでくれた事が今回の優勝に結びついたと感じていますし、選手達もいかに基本・基礎が大切か再認識した合宿でもあったと思います。

今シーズン実業団大会・国民体育大会・全日本総合と不本意な結果だっただけにプレイオフ大会の選手達の頑張りには感謝あるのみです。

今後も、ご観戦いただける皆様に感動していただけるゲームができるように選手と共に努力してまいります。

多くのご声援に対し心から感謝申し上げ優勝報告といたします。

本当にご声援ありがとうございました。

オムロン・西窪監督

■女子最高殊勲選手

山口　文子

オムロンに入部以来何度か日本一の経験をさせて頂きましたが、自分自身がコートの上に立ち味わう日本一というのは今回が初めてで、その上最高殊勲選手賞まで受賞する事ができ、1年を振り返ってみても最高のシーズンでした。

今回この賞を受賞できたのも、監督をはじめチームのみんな、応援して下さった方々本当に皆の力があってこそ頂けたもので、感謝し、98年も頑張りたいと思います。

第22回日本ハンドボールリーグ成績表

順位	1部男子	湧永製薬	本田技研	大同特殊鋼	中村荷役	三陽商会	日新製鋼	大崎電気	北陸電力	勝敗	分数	敗数	勝点	総得点	総失点	差
1	湧永製薬		△19○21	○26○16	○29○20	●16△24	○25○27	○23○28	○34○39	11	2	1	24	347	264	76
2	本田技研	△19●20		○19●19	○19○13	○20○23	○23○20	○20○22	○23○31	11	1	2	23	291	241	50
3	大同特殊鋼	●20●14	●18○22		○23○25	○25○22	△22○25	○26○19	○23○36	10	1	3	21	321	258	63
4	中村荷役	●22●17	●13● 9	●17●17		●19○24	●24○20	○23○21	○33○26	6	0	8	12	285	277	8
5	三陽商会	○19△24	●19●20	●19●19	○20●20		○24●18	△21●19	○25○25	5	2	7	12	292	290	2
6	日新製鋼	●19●20	●16●18	△22●21	○26●18	●22○22		●21○21	○29○29	5	1	8	11	304	308	-4
7	大崎電気	●18●20	●17●21	●18●15	●16●14	△21○25	○22●17		○30○31	4	1	9	9	285	296	-11
8	北陸電力	●20●11	●10●18	●14●16	●18●16	●13●14	●21●20	●15●17		0	0	14	0	223	414	-191

※4－5位は対戦間得失点差による

順位	1部女子	オムロン	北国銀行	日立栃木	イズミ	大崎電気	大和銀行	立山アルミ	ジャスコ	勝敗	分数	敗数	勝点	総得点	総失点	差
1	オムロン		●21●19	△21○22	○23○29	●31○25	○20○30	○32○34	○22○23	10	1	3	21	351	303	48
2	北国銀行	○29○27		△24●20	○33○27	△36●27	○31○29	○25△20	○28○24	9	3	2	21	380	329	51
3	日立栃木	△21●21	△24○23		△27●22	○36○36	○29○39	●24○29	○23○27	8	3	3	19	381	329	52
4	イズミ	●20●26	●16●25	△27○27		●29○34	●28○29	○30○34	○29○34	7	1	6	15	388	375	13
5	大崎電気	○32●21	△36○33	●23●30	○31●29		●27●29	●29●29	○35○31	5	1	8	11	415	444	-29
6	大和銀行	●13●18	●26●23	●21●28	○30●24	○29○38		○36●27	●23○33	5	0	9	10	369	403	-34
7	立山アルミ	●20●22	●18△20	○25●22	●21●29	○36○31	●35○29		●22●25	4	1	9	9	355	398	-43
8	ジャスコ	●18●15	●23●22	●20●19	●22●29	●28●28	○27●21	○23○26		3	0	11	6	321	379	-58

※1－2位は、対戦間成績による

順位	2部男子	車体	本田熊本	デンソー	アラコ	三景	トヨタ	トクヤマ	KFC	勝敗	分数	敗数	勝点	総得点	総失点	差
1	トヨタ車体		○30○25	○28○32	○36○33	○22○29	○30○26	○34○25	○36○32	14	0	0	28	418	247	171
2	本田技研熊本	●15●12		○25●22	○26○30	●22○29	○26○26	○21○25	○31○30	10	0	4	20	340	332	8
3	デンソー	●24●20	●23○24		△32○32	●27●24	●25○33	○31○29	○30○43	7	1	6	15	397	372	25
4	アラコ九州	●21●23	●21●27	△32●31		○25○32	○27○37	●22○31	○28○41	7	1	6	15	398	373	25
5	三景	●16●19	○29●21	○29○29	●24●27		●21○31	●24○31	○26○32	7	0	7	14	359	348	11
6	トヨタ自動車	●19●16	●25●22	○32●25	●24●22	○25●21		○31●17	○27●23	4	0	10	8	329	372	-43
7	トクヤマ	●16●15	●18●24	●21●22	○23●21	○25●22	●18○24		●24○38	4	0	10	8	311	366	-55
8	ケー・エフ・シー	●14●17	●21●22	●22●22	●18●25	●24●21	●22○26	○25●20		2	0	12	4	299	441	-142

※3－4位は対戦間成績、6－7位は対戦間得失点差による

順位	2部女子	シャトレーゼ	ブラザー工業	ソニー国分	ムネカタ	勝敗	分数	敗数	勝点	総得点	総失点	差
1	シャトレーゼ		●17○32△21○28	○31○29○35○34	○33○43○33○31	10	1	1	21	367	181	186
2	ブラザー工業	○24●17△21●10		○24○23●19○22	○37○29○32○19	8	1	3	17	277	202	75
3	ソニー国分	●22●19●15●16	●18●19○22●12		○27○38○24○32	5	0	7	10	264	262	2
4	ムネカタ	●13● 6 ●11● 7	●10● 4 ●12● 7	●16●11●17● 1		0	0	12	0	115	378	-263

＊印・最終順位はプレーオフの結果による

オムロン No.20石偉のロングシュート

第22回日本リーグ

プレイオフ

本田 No.20セルゲイ・ジザ選手のミドルシュート

熱戦

湧永No. 7 中山選手

グラフ

日立No.10松本選手のカットイン

オムロンキャプテン田中選手のインタビュー

オムロン表彰式

「クマモトの〝財産〟を大切に」

企画・広報委員
早川　文司

Free Throw（フリースロー）

26年ぶり日本での冬季オリンピック長野大会は、数々の名ドラマを見せてくれた。その中でも、日本五輪通算100個目の金メダルが、あの平成日の丸飛行隊とは、なんともうれしいニュースだった。テレビにくぎ付けになった人も多かったことだろう。

そのドラマを見ながら、私は昨年熊本でのハンドボール世界選手権の興奮ぶり、とりわけ秒差で日本が敗れたフランス戦を思い浮かべていた。勝負への駆け引き、強固な意思、そして運ーそれらがすべてマッチしてこそ、メダルに手が届く。きびしい勝負への世界を改めて知らされた思いがしたのだ。

それはともかく、今回の長野オリンピックでも激しい戦いの裏側で、地元民が心温まる〝もてなし〟で選手を迎えた。「一国（地域）一校」運動である。交流会の開催や盛んな声援ー世界からやって来た強豪たちには、何よりの心の安らぎとなったことだろう。

こうした運動は、94年の広島アジア大会で始まった。各地域の公民館と参加国（地域）が手をつなぐ「一国一館」運動である。あれから4年目を迎えた今でも、相互訪問など交流を続け国際親善に貢献しているのは素晴らしいことである。

長野の「一国（地域）一校」運動は、ハンドボールが熊本世界選手権での企画と同じもの。記憶されている人も多いだろう。それぞれの〝生徒応援団〟が連日会場に詰めかけ、担当した国・地域の旗を振り、大声を張り上げて選手を力づけた。試合の合間を縫っては学校を訪問し、地域商店街ともなごやかに交流してきずなを深めた。

長野オリンピックをテレビ観戦しながら、あの地鳴りのような興奮がきのうのようによみがえってきた。生徒たちにはいい思い出として残っているだろう。交流の輪は今、どんな広がりをみせているだろう。続いているだろうか。続いてほしいと思う。世界を知る、国際感覚を身につけるためには格好の〝教材〟であったはずだ。

若い彼らにとっては、またとない素晴らしい体験、出会いであったに違いない。このような貴重な経験は、なかなか望んでもできるものではない。ぜひともこれを生かして、自分のものにしたいものである。〝その時〟だけで終わってしまっては、あまりにも寂しいと言わざるを得ない。将来につながる〝財産〟は大切に守りたいものである。

◎第3回aiaiハンドボールフェスティバル◎

選手、観客一体となって ハンドボールを楽しむ

広島県ハンドボール協会副理事長（広報担当）山本　一

2月1日に広島市東区スポーツセンターにおいて第3回aiaiハンドボールフェスティバルが開催されました。

当日は第22回日本ハンドボールリーグを締めくくる後期最終日でもあり定員1000人の会場には立見席を用意するほどの1300人余りの観客で埋まりました。

このハンドボールフェスティバルは今回で3回目を迎えた訳ですが一人でも多くの人にハンドボールの楽しさを知ってもらい、ハンドボールの魅力を肌で感じてもらうために株式会社イズミ、大塚製薬株式会社の協賛のもとに始まったものです。

日本リーグの試合観戦の後、出場した選手やゲストを交えて小中学生を中心とした一般の方とボールを使ってゲームやコンテスト、豪華商品の当たる抽選会を行いハンドボールに親しんでもらいます。

1回目のゲストは前年広島カープを引退し解説者となっていたユニークなキャラクターの持ち主西田真二氏（PL学園―法大―広島カープ）、2回目の去年は広島カープの現役選手で今や押しも押されぬカープの看板打者でセリーグでも有数のパワーヒッターの金本知憲選手を迎えました。

そして今回はフジテレビ系で放送されています「黄金ボキャブラ天国」でおなじみの若手お笑いコンビT・I・M（ティ・アイ・エム）のお二人をゲストに迎え楽しい一日を過ごしました。フェスティバルは主催である広島県ハンドボール協会会長山下泉氏、協賛会社を代表して㈱イズミ社長山西泰明氏の挨拶により開始されました。

第1部は日本リーグの男女2試合、第2部はゲストを交えてのアトラクションの構成です。コート上では第1試合を戦うイズミと北国銀行が試合前のアップを始めましたが司会者とゲストのT・I・Mそれに解説者の酒巻清治氏（全日本ナショナル男子チームコーチ・湧永製薬OB）の三者がルールやプレーについての解説をおもし

第1部　日本リーグ湧永製薬対日新製鋼戦　湧永ブラマニスのガッツ

第2部　コントロールコンテスト。ゲストのTIMの投球

ろおかしく実況してくれています。
　日本リーグ第1試合のイズミ対北国銀行戦はこの三者による場内実況生放送です。ボリュームも試合の進行の妨げにならない程度に上げ賑やかに放送していました。
　T・I・Mの二人も迫力あるプレーを目の当たりにして真面目な質問、放送を行っていました。観客の中には初めてハンドボールを観戦したという人も大勢いたと思いますが場内放送に引きつけられるように両チームへの声援をしていました。
　第2試合は湧永製薬対日新製鋼の試合でした。湧永製薬はプレーオフ出場が決まっていますが勝てば第1位で通過できますし、日新製鋼はプレーオフの出場はならなかったものの簡単には引き下がるわけにはいきません。今年最後のゲームであり地元同士の対戦なので両チームの応援団も多数入場し迫力満点の試合を行い、ハンドボール競技の格闘技的要素を観客に魅せてくれました。
　試合終了後地元広島の3チームの選手とゲストのT・I・Mを交えてのアトラクションが始まりました。小中学生を中心に400人位の観客がハンドボールコート上に降りてきましたが先程までコートで死闘を繰り広げていた湧永、日新の選手達それにイズミの選手達と間近に接することが出来た子供達は握手をしたり写真を撮ったりと大変なはしゃぎようでした。参加した選手達も日頃の厳しい試合や練習から開放され、久々に童心にかえって楽しんでいたようです。
　アトラクションはゴールを4カ所に置きクロスバーより吊した的（まと）にむけてボールを当てるコントロール競争、それに日本リーグのゴールキーパーにゴールに入ってもらいシュートを打つシューティングコンテストを行いました。それぞれ入場時に受付でもらった参加証の結果欄に係りの人に記入してもらいます。
　ボールを使ってのゲームの後に広島県ハンドボール協会賞として今や垂涎の的のNINTENDO64やイズミの商品券、大塚製薬のエネルゲン、イズミの選手のサインボール、日本リーグトレーナー等の当たるお楽しみ抽選会を行いました。最後に大塚製薬の宮川さんの挨拶でフェスティバルの幕を閉じました。
　こうしたフェスティバルを行うことによってハンドボールファンは確実に増えていくと思います。来年は協賛する会社も増える予定なのでもっと充実したフェスティバルとなることと思います。

T・I・Mとイズミのゴールキーパー村上多映選手。
何を話しているのかな？

中山選手の見ている前で将来の全日本選手を夢見て…

全日本のエース、中山剛選手（湧永）の模範投球…当たったかな？

連載

レフェリングの事例集

元IHFレクチャー　光嶋　磯雄

事例4【ルール適用の誤り】
プレイヤー交替を頻繁におこなうチームが、ある時CPが7人いる状態になったため記録係から通告されたので、レフェリーはタイムアウトをとり、1人CPを退場にして試合を再開した。これはルール適用のミスで、相手チームはアピール可能である（4：4～6、17：3a）。合わせて指名退場が伴う。余分にコートに入ったプレイヤーだけでなく、同時に試合中のコート上のプレイヤー1人をチームで指名して2分間退場を負担させる（4：6第3文と注釈）。
出場資格のないものが入った時は、失格プラス指名退場となる。記録係は、不正交代又は不正出入場を発見次第、直ちに通告しなければならない。
（4：3～6、19：2c、d、e）

事例5【ルール適用の誤り】
フリースロー実施時に、防御側の1人がスローをするプレイヤーから3m以内にいたためレフェリーは修正した。再開後再び3m以内に侵入したのでレフェリーはこのプレイヤーを退場にした。これはレフェリーの早とちりであり、まず修正がおこなわれ、その次は警告、その次が退場の順序で罰則を適用することになっている。
（13：11、13：3～5、16：7第3文、17：1c、d、17：3e、17：12a）

事例6【レフェリーの不注意】
なんらかの修正や注意指導の後の再開の時、レフェリーが再開の笛の合図を忘れることがある。このときに得点があれば問題となる。パートナーレフェリーが注意していれば助言できることだが、これにより計時係が迷惑するので、再開の笛が吹かれてないと気付けば、計時係はすぐに声をだすか、笛を吹くか又はコート内へ走りこんででもレフェリーに注意を促す必要がある。
（2：2、4、19：2a）

事例7【不徹底な観察】
Aチームのプレイヤーが倒れこみシュートで得点した後、Bチームはスローオフの位置に着いたが、相手の得点したプレイヤーがまだゴールエリア上に横たわっているのに、レフェリーは開始の笛を吹きBチームは得点した。
レフェリーは、倒れているプレイヤーへの処置を優先しなければならないので、タイムアウトをとる。パートナーレフェリーの注意力も大切である。この時の得点は、認められない。倒れているプレイヤーが時間つぶしを狙った演技の可能性もあるが？
（IHF解説　1h）

事例8【怠慢なレフェリー】
あるレフェリーが若いときの苦い思い出として挙げたこと。
CRからGRになるための走りが、攻撃側の速攻スピードに遅れてしまい（ついていけず）、シュート動作とゴールインを確認するための位置に着くことが出来ず、重要で微妙な状態を予断・推測で得点を認める笛を吹いてしまい、その時傍にいた防御プレイヤーから「そんな所から見えるのかよ！」と皮肉の言葉を浴びせられ、穴があったら入りたかったと。ちょっとでも知識のあるプレイヤーならやりかねないことである。皮肉の言葉への処置・対応とは別の問題である。

事例9【不十分な知識】
ボール保持プレイヤーの違反で笛が吹かれたが、彼は数歩動いてからボールを放り出した。レフェリーは笛を吹いて彼を警告とした。
このようなにきまったとおりにしないレフェリーもたまにはいる。反則判定の笛が吹かれたならば、直ちにボールをその場のフロアーに置くというルールを守らなかったプレイヤーに間違った処置をしてしまったのである。「アアッ！なんだあのレフェリーは！」とみんなが呆れることとなる。これは力量不足のレフェリーに巡り合ってしまった不運であり、アピールの対象にならないが、試合後に審判

連載／レフェリングの事例集

光嶋　磯雄

長や指導部門の人から、特別注意を受けることになる。（13：8、17：3d）チーム側からもおそらく不規則発言が起こるであろう。

事例10【威信を示すこと】

激しい攻防が入り交じっての場面で、レフェリーはあるプレイヤーを警告したが、ドサクサに紛れて、誰を警告したのかわからなくなってしまい、結局無実のプレイヤーを警告にしてしまった。この時「私は何もしていないのに！」と苦情を洩らすかもしれないが、レフェリーはこれを頭から非スポーツ的行為と決め付けるか？このプレイヤーは渋々ながらも判定に従うであろうが、一度は止むを得ないとしても、再度にわたってはならないことである。パートナーレフェリーとの連携も大切だが、罰則の適用では、対象プレイヤーの眼前でイエローカードを高くかかげて、相手の眼を見据えて警告すべきであり、背を向けていたらその正面に立ち、離れていくようであれば呼び戻してでも徹底させること。必要とあればタイムアウトをとる。ここが、肝心な見せ所である。記録係との連携関係からも特に重要である。

事例11【ルール適用のあやまち】

クリアゴールチャンスとなり、ボールとともに突進しているプレイヤーが、後方からの違反妨害でチャンスを潰された。レフェリーは、警告とフリースローと判定した。このレフェリーは、パートナーレフェリーも同様に、ノーマーク・クリアゴールチャンスでの対人反則とルールの理解が不十分である。プレイヤーから「あれは7mスローですよ、おかしいじゃありませんか」と問われるかもしれない。

（14：1e）

事例12【記録・計時係の不注意】

直ちに失格にしなければならないのに、退場処分で済ませてしまうこと。

粗暴危険行為と名前と背番号がメンバー表にないプレイヤーがコートに入ったときがこれにあたる。失格にするとともにコート上のプレイヤー1名も退場させる。パートナーレフェリーと記録係の注意力も不可欠である。

（4：3、17：5a、17：6終わりの文）

事例13【ルール適用のあやまち】

フリースローをするプレイヤーがパスをするのに戸惑っているとき、レフェリーはやにわにオーバータイムの笛を吹いた。これはレフェリーのミスであり、レフェリーが催促（開始）の笛を吹いてから3秒後に反則となる。プレイヤーが「笛が鳴っていません」というかもしれない。ゴールスロー・スローインも同じ。

（16：3b）

事例14【不十分な観察】

シュートがGKの腹部を直撃したので、GKはゴールエリアで昏倒してしまった。ボールは跳ね返って攻撃側が取り、再びシュートしてゴールに入れたのでレフェリーは得点とした。この場合GKにボールが当てられた時、直ちにタイムアウトをとりGKの安全を確かめて相当の注意をするなどの義務を、このレフェリーは忘れているのではないか？パートナーレフェリーもこれに反応しなければ同じく遺憾なことである。勿論アピールによるか、又は記録席役員から（審判長）助言により、得点は取り消しになる。

（8：5を準用する、IHF解説1h）。（新）

ハンドボール競技規則改正点

（財）日本ハンドボール協会審判委員会

〔競技規則の改正点〕

この競技規則は、1998年4月1日より実施される。

原注やレフェリーのジェスチャー、競技規則解釈、交代地域規定も、全て競技規則に含む。

第2条　競技時間

2の1　16才以上の男子、および、女子の競技時間は、前後半30分ハーフとし、10分の休憩時間を入れる。

12才から16才までの競技時間は、前後半25分ハーフ、8才から12才までは、前後半20分ハーフとし、いずれの場合も休憩時間は10分とする。

8才以下で行う「ミニハンドボール」では、前後半10分、または15分ハーフとし、10分の休憩時間を入れる。

第4条　チーム

4の5　不正交代は、違反したプレイヤーが、サイドラインを越した場所で、相手チームに、フリースローが与えられる（13：1a）。しかし、競技が中断したときに、相手チームに、有利な地点にボールがあるときは、その有利な地点から、フリースローを行う。加えて、違反したプレイヤーは、退場となる（17：3a）。競技の中断時に、不正交代が起きた場合は、…（以下同文）

第7条　ボールのあつかい方

次のことは許されない。

7の8　足、または、膝よりも下の部位でボールに触れること。

ただし、相手チームのプレイヤーから、投げつけられたときは除く（13：1d）。

『ボールが、足、または、膝から下の部位に触れても、そのプレイヤーやチームが、有利にならなければ、罰することはない』を削除。

旧7の9　『床に止まっているボール、あるいは、転がっているボールに対して、身を投げかけること。…』を全文削除。

7の10　ボールを所持しているチームが、攻撃しようとしなかったり、ゴールへシュートせずに、ボールを持ち続けようとすること。

これは、パッシブプレイとみなされ、レフリーは、予告のジェスチャー（ジェスチャー19）をするべきである。その後も、ボールを所持しているチームが、シュートをしようとしなかったときには、相手チームに、フリースローが与えられる。このフリースローは、競技が中断されたときに、ボールがあった場所から行われる（13：1f）。

第8条　相手に対する動作

8の1　次のことは、許される。

(a)ボールをブロックしたり、得るために、腕や手を使うこと。

(b)いかなる方向からでも、相手からボールをとるために、開いた片手を使うこと。

(c)ボールの所持にかかわらず、相手プレイヤーの進路をさえぎるために、体を使うこと。

(d)相手に正対し、まげた腕を使って、相手の身体に触れること。さらに、相手の動きに合わせてついてゆくために、この接触を続けること。

8の2　次のことは、許されない。

(a)相手のプレイヤーが持っているボールを、奪い取ったり、たたくこと。

(b)腕、手、脚で相手プレイヤーを阻止したり、押し出すこと。

(c)相手に抱きついたり、つかんだり、押すこと。または、走ったり、ジャンプして相手にぶつかること。

(d)その他、相手プレイヤーが、ボールを所持しているかどうかにかかわらず、規則違反によって妨害したり、危険をおよぼすこと。

(注)競技規則8：2aからdの規則違反は、攻撃側に対しても、防御側に対しても同様に適用する。

攻撃側の違反は、攻撃側プレイヤーが、走ったり、ジャンプして相手にぶつかったときに、特に見られる。このルールが適用されるためには、防御側プレイヤーは、身体接触の起こる時点で、すでに、攻撃側プレイヤーの正面で、前方に動くことなく、正しい位置取りをしていなければならない。

8の5　相手に危害を及ぼすような行為に対しては、失格としなければならない（17の5b）。

失格としなければならない行為とは、次のようなものである。

(a)ボールを投げようとしているプレイヤーや、パスをしようとしているプレイヤーの腕を、横、または、後ろから叩いたり、引っ張ること。

(b)結果的に、相手の頭や、首を殴るような行為をすること。

(c)足や膝、その他、あらゆる方法で、相手の身体に打撃を与えること。

(d)走ったり、ジャンプしている相手を押したり、相手が身体のコントロールを失うような行為をすること。

8の6　著しくスポーツマンシップに反する行為（17：5d）をしたときは、失格となる。

8の7　競技時間中に、暴力行為をしたプレイヤーは、追放となる（17：7～9）。

第10条　スローオフ

10の3　スローオフは、コートの中央から、どの方向に向かって行ってもよい。スローオフは、レフェリーの笛の合図から、3秒以内に行わなければならない（13：1h）。スローオフを行うプレイヤーは、ボールを離すまで、片足をセンターラインの上に置いていなければならない。

スローオフを行うチームのプレイヤーは、スローオフを行うプレイヤーの手からボールが離れるまで、センターラインを、踏み越してはならない（16：1h）。

スローオフの笛が吹かれた後、スローアーがボールを離す前に、スローを行うチームのプレイヤーが、センターラインを踏み越したときには、相手チームに、フリースローが与えられる（13：1h）。

10の4　前後半（延長戦も含む）の競技開始時のスローオフのとき、全てのプレイヤーは、自陣のサイドにいなければならない。

しかし、得点の後のスローオフのときは、得点したチームのプレイヤーは、コートのどちらのサイドにいてもよい。

スローオフのとき、相手チームのプレイヤーは、スローオフをするプレイヤーから、少なくとも、3m離れていなければならない（16：7）。

第14条　7mスロー

14の2　7mスローを判定をしたときには、レフェリーは、必ずタイムアウトをとらなければならない（2：4、競技規則解釈1）。

14の9　7mスローを行うとき、

スローを行うプレイヤーの手から、ボールが離れる前に、ゴールキーパーが、4mライン（1：6、5：14）を踏み越えて、得点とならなかったときは、7mスローを再び行う。

第18条　レフェリー

18の9　どちらのチームを罰するか、どちらのチームがスローインを行うか、両レフェリーの判定が異なったときは、常に、コートレフェリーの判定が、採用される。

コートレフェリーは、はっきりと、向指示と笛の合図をして、競技を再開させる（16：3h）。

18の13　両レフェリーは観察による事実判定は、最終的なものである。競技規則に適合しない判定に対しては、異議を申し立てることができる。競技中、「チーム責任者」だけに、その権利がある。

第19条　タイムキーパー・スコアラー

19の4　公示時計に、退場時間を表示することができないときには（IHFの公式試合では、少なくとも、各チーム3名以上の退場時間計時を表示する）、タイムキーパーは、退場になったプレイヤーの入場時間と番号を、オフィシャル席に掲示しなければならない。これらの設備がないときには、チーム役員に退場者カードを渡す。

レフェリーのジェスチャー

レフェリーは、違反の判定をしたとき、直ちに、スローの方向を指示しなければならない（ジェスチャー7、9、13）。

その後、11、12、14～18に該当する場合は、規定のジェスチャーを行わなければならない。

判定の理由がわかりにくいときは、1～6、8のジェスチャーを適切に行い、理由を示す。

ジェスチャー19に「パッシブプレイの予告合図」を追加する。

競技規則の解釈

1、タイムアウト（2：4）

タイムアウト中の違反は、競技時間中の違反と同じに扱う。

競技時間が中断されるとき。

次の場合は、必ず、タイムアウトをとらなければならない。

a）レフェリースローを判定したとき。

b）失格や追放としたとき。

c）タイムキーパー、または、IHFや大陸連盟のTD（Technical Delegate）メンバーから合図があったとき。

d）チームタイムアウトのとき。

e）7mスローの判定をしたとき。

原則として、次の場合は、タイムアウトをとる。

f）異常事態がおきたとき。

g）協議が必要なとき。

h）負傷が考えられるとき。

i）退場時間中に、同チームのプレイヤーを退場させるとき。

j）ゴールキーパーの交代や、各種スローの実施時などに、遅延行為が行われたとき。

k）ボールがコート外に出て、レフェリーから見えなくなったとき。

次の場合は、必要に応じてとる。

l）警告、退場のとき。

m）不正交代や不正入場のとき。

n）プレイヤーが、ボールを遠くに投げてしまったり、渡さないとき。

2、チームタイムアウト

各チームは、正規の競技時間の前半、後半（延長時間を除く）、各1回ずつ、1分間のチームタイムアウトを請求する権利がある。チームタイムアウト請求は、緑色のカードを用いて行うことが望ましい。一度請求したチームタイムアウトは、取り消すことができない。

チーム役員が、タイムキーパーにチームタイムアウトを請求したときは、次の状況でチームタイムアウトをが与えられる。

・ボールが、チームタイムアウトを請求したチームのゴールに入ったとき（得点されたとき）。

・ボールが、チームタイムアウトを請求したチームのアウターゴールラインを越えたとき（ゴールキーパースローのとき）。

タイムキーパーは、笛を吹いてゲームを中断させ、タイムアウトのジェスチャーをし、どちらのチームがチームタイムアウトを請求しているかを、伸ばした腕で指し示す。緑色のチームタイムアウト請求カードは、請求したチーム側の机上に立てておく。

スローオフやゴールキーパースローが、すでに行われたならば、チームタイムアウトを与えてはならない。

コートレフェリーが、タイムアウトの合図を出し、そして、タイムキーパーが時計を止める。レフェリーが、チームタイムアウトを認めたときには、ジェスチャー18（チームタイムアウト中のコート内への立ち入りの許可）を行う。

この時点から、タイムキーパーは、専用の時計で、チームタイムアウトを計時し、その管理を行う。スコアラーは、チームタイムアウトを請求したチームを、記録用紙に記入する。

チームタイムアウト中、プレイヤーとチーム役員は、コートの内、外を問わず、自陣の交代地域の前にいなければならない。2人のレフェリーは、ボールを持ってコートの中央で待機し、そのうち1人が、協議の必要があれば、速やかにオフィシャル席に行くことができる。

チームタイムアウト中の競技規則違反は、競技時間中の違反と同様に扱う（解釈1）。違反したプレイヤーがコート内にいても、交代地域にいても、スポーツマンシップに反する行為は、17：3c、または17：3の最終段落を適用し、退場とすることができる。

50秒経過したときにタイムキーパーは笛を吹き、10秒後に競技を再開しなければならないことを知らせる。競技は、スローオフ、または、ゴールキーパースローで再開する（16：3a）。

レフェリーの笛の合図で、タイムキーパーは時計をスタートさせる。

7、パッシブプレイの予告ジェスチャー（7：10）

コートレフェリーが、パッシブプレイと判断したときは、手を挙げて（ジェスチャー19）、シュートをする意図が認められないことを知らせる。ゴールレフェリーも、同じジェスチャーをしなければならない。その後、攻撃側チームが、引き続きゴールにシュートを打とうとしなければ、原則として、コートレフェリーが、パッシブプレイの笛を吹く。

1度出された予告ジェスチャーは、攻撃側がボールを失って、攻撃を終えるまで有効である。攻撃側にフリースローが与えられた後でも、パッシブプレイが認められるときには、ジェスチャーを繰り返すことなく、判定すべきである。

この予告のジェスチャーによって、チームはレフェリーのパッシブプレイの判断に対応できるようになる。

レフェリーは、次のような明らかな遅延行為に対しては、予告ジェスチャーなしで、パッシブプレイの判定をすることが出来る。

・あまりにもゆっくりとしたプレ

イヤーの交代。
・他の味方のプレイヤーにパスできるにもかかわらず、自陣にロングパスを戻す。
・明らかなシュートチャンスにシュートをしない。

9、スポーツマンシップに反する行為

j）防御側プレイヤーが、繰り返しゴールエリアに侵入したり、ゴールエリア内から、必要以上にゆっくり戻ることによって、相手プレイヤーが不利となった場合。
k）いかにも相手プレイヤーが、違反したように見せかける、演技を行うこと。

13、アドバンテージ（13：6、14：10）

得点により、試合の勝敗が決まる以上、攻撃側が、不利になるときは、フリースロー（13：6）や7mスロー（14：10）の判定をしてはならない。したがってレフェリーは、有利な状況（人数で勝っている、有利な位置取りにある）が生まれ、シュートできるかどうかを判断するために、待たなければならない。

アドバンテージの精神を優先するためには、判定を遅らせることが必要である。しかし、シュートの際に、規則違反（例えばオーバーステップやゴールエリヤへの侵入）や、レフェリーが早く笛を吹いてしまい、得点にならなかったときには、レフェリーは、フリースローか7mスローの判定をしなければならない。

攻撃側チームにとって、防御側プレイヤーに対する罰則の判定は重要であるが、それは2次的なものなので、罰則は、一連の動作が完了した時点で、判定すべきである。

16、競技の中断（4：5、18：14）

レフェリーや、IHF、または、大陸連盟のTD（Technical Delegate）が、競技を中断し、プレイヤーや、チームの役員を注意、あるいは、罰則を適用したときには、相手チームのフリースローによって、競技を再開する。フリースローは、違反が行われた地点、もしくは、相手チームに取って有利な地点にボールがある場合は、その地点から行われる。

明らかな得点のチャンスに、競技が中断されたならば、7mスローが与えられる。

しかし、タイムキーパーが、自分自身で規則違反を見つけたために、競技を中断してしまったときには、中断の状況にふさわしいスローで再開される。原則として、タイムキーパーは、競技が中断したときに、違反について注意を促すに留めるべきである。

●交代地域規定

5、チーム役員は、競技中も、競技規定に従い、フェアプレイとスポーツマンシップの精神に則り、自チームを指導し、管理する権利と責任をもつ。原則として、チーム役員は、ベンチに座っていなければならない。

次のような場合に、チーム役員は、交代地域内で立ち動くことができる。
・プレイヤーを交代させるとき。
・コートやベンチにいるプレイヤーに戦術的な指示をするとき。
・治療行為をするとき。
・チーム責任者が、タイムキーパー、スコアラーと話し合うとき。「チーム責任者」とは、あらかじめ登録された者であり、例外的に認められた場合だけである。

原則として、プレイヤーは、ベンチに座っていなければならない。

プレイヤーは、次のことが許される。
・十分な場所があり、競技の妨げにならないならば、ベンチの後方でボールを使わず、ウォーミングアップすること。

次のことは、許されない。
・レフェリーや、タイムキーパー、スコアラー、プレイヤー、チーム役員、観衆を挑発、抗議、その他のスポーツマンシップに反する方法（言葉、表情、身振り手振り）で、罵ったり、侮辱すること。
・競技に影響を与える目的で、交代地域を離れること。
・ウォーミングアップのとき、サイドラインに沿って、立ったり、動いたりすること。

7、レフェリーが、交代地域規定の違反に気がつかなかったとき、次の競技の中断時に、タイムキーパー、スコアラーが、それを知らせなければならない。

レフェリーの事実観察による判定をのぞき、IHF、または、大陸連盟のTD（Technical Delegate）は、起きる可能性のある規則違反や、交代地域規定違反を、次の競技中断時に、レフェリーに指摘することができる。

このような場合には、競技は中断したときの状況にふさわしいスローで再開する。

しかし、IHF、または、大陸連盟のTDが、違反を罰するために、即座に競技を中断する必要があったときには、相手チームのスロー（フリースロー、または、明らかな得点のチャンスのときは7mスロー）で再開する。

レフェリーは、TDと協議した後、交代地域規定違反をしたプレイヤーやチーム役員を罰し、それを記録用紙に記載する。

8、レフェリーが、交代地域規定の違反に、気づいていながら対処しなかったならば、IHF、または、大陸連盟のTDは、適切な機関（例えば、裁定委員会）に、報告書を提出しなければならない。

この機関は、交代地域の出来事や、レフェリーの行動について裁定する。

平成10年度ルール変更一覧表

項　目	変　更　内　容	コ　メ　ン　ト
競技時間 （２の１）	高校生以下の競技時間が延長される。	高校生　25分－10分－25分　→　30分－10分－30分 中学生　20分－10分－20分　→　25分－10分－25分 小学生　15分－10分－15分　→　20分－10分－20分
キックボール （７の８）	足または膝よりも下の部位でボールに触れた場合は、反則となる。ただし、相手チームのプレイヤーから投げつけられた場合は除く。	従来は、ボールが足または膝から下の部位に触れても、そのプレイヤーやチームが有利にならなければ罰せられなかった。
セービング	７の９を全文削除	相手に危険を及す等の規則違反がなければ、床に止まっているボールや、転がっているボールに対し身を投げかけることが許される。
パッシブプレイの予告ゼスチャー　（７の10）	消極的プレイに対し「パッシブプレイ」を判定する前に、レフェリーは、予告のゼスチャーでそれを知らせなければならない。ただし、次のような明らかな遅延行為に対しては、予告ゼスチャーなしで、パッシブプレイの判定をすることができる。 ａ．あまりにもゆっくりとしたプレイヤーの交代。 ｂ．他のプレイヤーにパスが出来るのにボールを遠い自陣に戻す。 ｃ．明らかなシュートチャンスにシュートをしない。	平成９年度より実施中。 ただし、予告なしでパッシブプレイを判定する項目が、明確になった。
相手に対する動作　（８の１）	相手の正面で、曲げた腕を使って、相手の身体に接触しながら防御することは許される。	許される防御行為が追加された。
攻撃側の違反 （８の２原注）	攻撃側の違反となるのは、防御側プレイヤーが、身体接触の起こる時点で攻撃側プレイヤーの正面で、前に動かず、正しい位置取りをしているときである。	チャージングの判定の基準が、より明確になった。
失格となる行為 （８の５）	ａ．ボールを投げようとしているプレイヤーや、パスをしようとしているプレイヤーの腕を、横または後ろから叩いたり引っ張る。 ｂ．結果的に相手の頭や、首を殴るような行為。 ｃ．足や膝等で、相手の身体に打撃を与える行為。 ｄ．相手が身体のコントロールを失うような行為。	失格としなければならない行為を明文化した。
スローオフの時のプレイヤーの位置　（10の３）	ａ．スローオフをするプレイヤーは、スローが終了するまで、片足をセンターラインの上に、置いておかなければならない。 ｂ．スローを行うチームのプレイヤーは、スローを行うプレイヤーの手からボールが離れるまで、センターラインを越えられない。 スローオフの笛が吹かれた後、スロアーがボールを離す前に、スローオフを行うチームのプレイヤーが、センターラインを踏み越したときには、相手チームにフリースローが与えられる。	スローオフをする時にセンターラインを踏むことが明記された。 また、得点の後、得点をしたチームのプレイヤーは、コートのどちらのサイドにいてもよい。スローオフの際の違反は「やり直し」ではなく、「相手にフリースローが与えられる」。
７ｍスロー時のタイムアウト （14の２）	７ｍスローを判定した時には、レフェリーは、必ずタイムアウトをとらなければならない。	一試合に要する時間が延びることが予想されるため、試合と試合の間隔を開ける必要がでてくる。
４ｍラインの位置　（14の９）	７ｍスローを行うとき、ゴールキーパーが４ｍラインに触れてもよい。	４ｍラインを、現在引かれている位置より、５cmゴールライン寄りにひく。
異議の申し立て （18の13）	両レフェリーの観察による事実判定は最終的なものであるが、競技規則に適合しない判定に対しては、競技中「チーム責任者」だけが異議を申し立てることができる。	旧ルールでは「チームの主将」だけにその権利があったが、その権利は「チーム責任者」に移った。
チームタイムアウト	各チームは、正規の競技時間の前半、後半（延長戦を除く）に各１回ずつ、チームタイムアウトをとることが出来る。	平成９年度より実施中。
スポーツマンシップに反する行為	ｊ）防御側プレイヤーが、繰り返しゴールエリアに進入したり、ゴールエリア内から必要以上にゆっくり戻ることによって、相手プレイヤーが不利になった場合。 ｋ）いかにも相手プレイヤーが違反したように見せかける演技を行うこと。	競技規則の解説９（スポーツマンシップに反する行為）に追加された。
交代地域規定５	次のような場合に、チーム役員は交代地域内で立ち、動くことが許される。 ａ．プレイヤーの交代を管理するとき。 ｂ．コートやベンチにいるプレイヤーに作戦の指示をするとき。 ｃ．チーム責任者がタイムキーパーやスコアラーと話し合うとき。 原則として、プレイヤーはベンチに座っていなければならない。	これまでチーム役員は、ベンチに座っていることが義務づけられていたが、許容される範囲が広がり、明確にされた。 「チーム責任者」とは、あらかじめ登録された者を言い、例外的に認められた場合だけ、オフィシャル（タイムキーパー・スコアラー）と話し合うことが出来る。判定に対する抗議や、示威行為は許されない。
交代地域規定７	レフェリーが交代地域規定の違反に気が付かなかった時、次の競技中断時に、タイムキーパー、スコアラーがそれを知らせる。	タイムキーパー、スコアラーの役割が増えた。

平成10年１月30日

ルール解釈に対する回答

1　スローオフについて

(1)スローオフは、コートの中央から行わなければならないが、その目安は？

【回答】スローオフは、センターライン上に、センターラインと区別出来る色の長さ30㎝、幅5㎝のライン（センターラインの色を変える）を引き、その30㎝のラインを踏んで行う。

(2)スローオフを行う際の足の位置は？

【回答】スローオフを行うプレイヤーは、ボールを離すまで、センターラインの上に置いておかなければならないが、もう片方の足は何処にあってもよい。

(3)スローオフの際、繰り返されるラインクロス、及びラインオーバーに対する対処。

【回答】（平成10年4月1日施行の新競技規則書に対応）

　スローオフは、10条の3、16条の1を適用し正しく行わせる。不正が繰り返される場合は、スポーツマンシップに反する行為とみなし、17条の1d、17条の3c、17条の11を適用する。

(4)スローオフを行う際、得点をした側のプレイヤーが、わざと倒れている場合の見分け方と、その対処法は？

【回答】故意に倒れているのか否かは、レフェリーが判断する。負傷等の事故ではなく、故意に倒れているとレフェリーが判断した場合は、スポーツマンシップに反する行為とみなし、17条の1d、17条の11を適用する。

(5)スローオフをしようと、センターライン上で待っているプレイヤーに対するパスを相手プレイヤーがカットした場合は？

【回答】17条の1cと17条の1dを適用し警告とし、繰り返された場合は退場となる。

2　一度出されたパッシブプレイのシグナルは、途中でフリースローがあっても、効力を失わないとされていますが、次のような場合にも適用されるのか？

(1)攻撃側がそのシグナルに気づき、積極的にシュートを打ちにいったにも係わらず、反則をされフリースローとなった場合は？

　または、打ったシュートがゴールのバーに当たり、リバウンドを得た場合でも、シグナルの効力は継続するのか？

(2)その時の反則で、防御側プレイヤーに罰則（警告・退場）が与えられた場合は？

　選手の負傷により、タイムアウトが取られた場合は？

【回答】上記のいずれの場合も、7条の10、競技規則解釈7「一度出された予告ゼスチャーは、攻撃側がボールを失って、攻撃を終えるまで有効である」により、出された予告のゼスチャーは有効である。

3　チームタイムアウト

(1)予約で出した請求カードは取り消しが出来ないが、ゴールイン等の直後に、クイックで出したときに、タイムアウトがとられなかった時のカードは扱いは？

【回答】いかなる場合も、一度請求したチームタイムアウトは、取り消すことが出来ない（競技規則解釈2）。

(2)チームタイムアウト中、プレイヤー（控え）がコート上にて、ランニングやパス、シュートの練習を行えるのか？

【回答】チームタイムアウト中、プレイヤーとチーム役員は、コートの内、外を問わず、自陣の交代地域の前にいなければならない（競技規則解釈2）ので、上記の行為は許されない。

(3)現在、オフィシャル席に、請求カードを立てるスタンドが1個しか用意されていないが、今後、2個用意する必要があるのか？

【回答】「チームタイムアウト請求カードは、請求したチーム側の机上に立てておく」(競技規則解釈2）とあり、2個用意すべきである。

4　ディフェンスがジャンプ（前方に、その場で、後方に）した場合の、チャージングの判定について？

【回答】攻撃側の反則は、攻撃側プレイヤーが走ったり、ジャンプして相手にぶつかったときに、特に見られる。この時、防御側プレイヤーは、攻撃側プレイヤーの正面で、前方に動くことなく、正しい位置取りをしていなければならない（8条の2原注）。したがって、ディフェンスが前方にジャンプした場合は、チャージングにはならない。その場でジャンプしてぶつかり、後方にジャンプしたり、他の規則違反がなかった時は、チャージングが見られる。しかし、チャージングか、否かの判定は、レフェリーの判断によるものである。

5　「レフェリーがタイムアウトをとり、コートへの入場を許可する合図を出した場合、交代地域にいるすべての者が、コートに入ることが出来る」という報告（1993年アジア選手権報告、後藤・清水）があり、現在日本では次の様な事が行われているが、許されるか否か？

例：Aチームに怪我人が出て、レフェリーがタイムアウトをとり入場の合図をした。

　Bチームのコーチがコート内に入り、選手に対し作戦を授けている。

【回答】Aチームの負傷者のためのタイムアウトであり、相手チームの監督が、コート内でミーティングをする事は許されない。また、Aチームの監督が、コート内でコーチングをすることも同様である。初めは注意を与え、繰り返されればスポーツマンシップに反する行為として処置する。

5　7mスローコンテスト中のベンチ管理について

【回答】7mスローコンテスト中も競技中なので、交代地域規定を適用する。

　交代地域規定5、6を参照。

6　Technical Delegateや立会人、会場審判長は、どのような権限があるのか？

【回答】平成8年9月25日付けで、日本リーグ会場審判長の任務についての指針は示している。現在、新競技規則にそって、IHFのガイドラインを基に、競技委員会と協議し、新しい要領の作成を検討中である。

7　全国大会に参加する審判員は、審判員の制服（エンジのジャケット）の着用が義務づけられているが、各ブロック大会の場合は如何か（必携に記載なし）。

【回答】現在、全国大会に参加する審判員には、審判員の制服の着用が義務付けられている（公認審判員規定第19条）。また、B級を取得した際に、制服（ジャケット）の購入を斡旋している。

　従って、ブロック大会に参加のC級の審判員には、現在のところ、制服の着用は義務付けられてない。A・B級の審判員については、ブロック審判長、大会審判長の指導に依る。

（平成10年1月26日）

審判技術研修会報告

審判委員会副委員長　斉藤　実

期日　平成10年2月7～8日
会場　大同特殊鋼　星崎体育館
プレーモデル　男子ナショナルチーム（強化合宿中）
参加者　審判委員会指導委員6名
　国際審判員　3ペア（1ペア公務欠席）
　ブロック代表　北海道・東北・北信越・東海・近畿・中国・九州。関東・四国は国際に兼ねさせ自主参加を加え総勢30名

かねてからトッププレーヤーのハードプレーをモデルにした、審判技術研修を実施したいと考えていた。これは単に審判員サイドだけの問題ではなく、プレーヤーにとっても日頃工夫努力したプレーが審判員に認められなかった。或いは、今自分が考えているプレーはルール的に評価されるのか、といった疑問の部分もあるだろうし、レフェリーと、笛と会話を通して検討する機会は絶対に必要と考えていた。

更には、よく耳にする言葉に「今回の大会は判定規準が判らなくて、プレーヤーも理解出来ないままに終わってしまった」。暗に判定或いはゲーム運営に地域差があることを指摘する。穿った見方をすれば、敗戦理由をレフェリーに当てたのかもしれないが、いずれにしても、こうした言葉が出てこないような環境を作らなければならないと考えていたところへ、強化部長から男子ナショナル選手団も研修会を望んでいるということで、実現した。

地域差の解消を考え、国際審判員だけでなく、全国から集めなければ意味がないので、各ブロックから1ペア招集した。

今回は大掛かりな為個人負担をお願いしながらの開催であった。

研修会の模様は次の通り。

【第一日】

正午に集合し、選手の昼休みを兼ねて新ルールの解説の後、練習に合わせて実技研修。

今回は、ナショナルチームの練習リズムを壊さず、参加者全員が吹く、を前提に進行させた。審判員は1日目グループと2日目グループに分けて、部分練習でも試合と同じ運営をせよ、と命じ、更に必要があればプレーヤーの注文に耳を傾けよという姿勢で実技に入った。

1対1
フェイント時のステップ。
チャージかプッシングか。
7mかナイスディフェンスか。
段階的罰則を適用するプレーかハードプレーか。
それらをしっかり捉える為の位置取りはどうか。

2対2、3対3と練習は進み、3グループに分けての5対5では、休憩グループと担当レフェリーとでディスカッション。

夜はプレーヤーとは行動が一致しなかったためレフェリーのみの研修。

【第二日】

最初のストレッチからプレーヤーの動きに加わり、反射能力を高める動作はウォーミングアップとはいえハードなものであった。

プレーヤーの疲労がピークに来ていることから、午前の練習のみで午後は休養を与えることになった。

第1日目とほぼ同じスケジュールで練習は進行し、レフェリーは2日目グループで消化。最後の種目は昨日と同じ5対5。

プレーヤーとの話し合いの中で出たものの中に、

＊自分はGKであるが、シュート失敗して自陣に戻る相手プレーヤーの前に立ちはだかり、自陣へ戻るスピードを遅らせる行動に出た。勿論身体接触は無い。日本リーグ及び全日本総合で、これを反則として取られた。どの規則に抵触するのか。

＊自分はポストマンである。ポストにパスが通ったとき、シュート打つ前に先ずディフェンスの足を見る。ディフェンスの足がエリア内に入っていれば、シュート失敗しても7mが貰える。そう思いつい力を抜いたシュートになる。ところが7mを与えられる場合と流される場合がある。どこに相違があるのか。

さて皆さんはどう答えてあげますか。

昼食後審判部のみでの研究会を持ったが、ここで出た主なものを紹介しますと、

＊パッシブの予告ジェスチャーを出すタイミングと、判定のタイミングは。

予告であるから、過去、パッシブを判定したタイミングより、多少早めがよい。また、判定のタイミングには、各審判員のハンドボール哲学が現われてくるため、一概にパスを何回程回したらとは言えないが、シュート体勢が作れないならば直ちに判定すべきであろう。但し、そのタイミングが試合を通して安定していること。

＊パッシブの予告を受けたチームがシュートし、リバウンドボールを再び手にした。予告は消えるか。

消えない。

予告ジェスチャーは、ボールが相手チームに移るまで有効である。シュートしようとして反則が繰返される場合も同様である。

と言ったところである。

選手側からも審判側からも、今回の試みに対して好評を得て終了することが出来た。今後も継続していきたいと思っている。

なお、今回実業団関係、学生関係の監督も対象にする予定であったが、日程の関係で3月21日・22日に再び大同特殊鋼体育館にて行うことになっている。

最後に疲れは最高であったろうに、ハードプレーを維持して下さったプレーヤーに感謝し、報告とします。

平成９年度審判委員会合同会議報告

日　時　平成10年１月24日(土)・25日(日)
場　所　東京代々木オリンピック青少年総合センター

1　審判委員会活動報告

⑴審査指導委員会報告
①平成10年度上級審判申請　書類審査結果報告
　Ａ級…16名中　16名合格
　Ｂ級…76名中　74名合格
(a)審判長印なし
(b)前年度講習会なし
(c)登録証なし
(d)相手ペアの不正記入
☆記録用紙の提出は、大会審判長が大会終了後に一括し、日本協会へ送付。
②平成９年度全日本大会審判員評価
　本年度優秀レフェリー
　　小林一夫・土屋雅男（埼玉）
　　藤井俊朗・大熨嘉彦（岡山）
　　阿部羅大造・浜野大助（石川）
⑵各専門委員会報告
①各ブロック活動報告
(a)高校・中学の競技時間の扱いについて
・平成10年度は都道府県レベルで対応してほしい。
(b)実連・中体連の副審判長はそろそろ連盟で出すようにしてほしい。（要望）
②各連盟活動報告
(a)中体連
・JOCジュニア・オリンピック大会に11ペアしか来なかった。次年度12ペア確保を！
・JOCジュニア・オリンピック大会の記録用紙が公式のものが使われていなかった。
(b)高体連
・報道機関のカメラマンの位置に問題があった。
(c)学連
・パッシブプレーの取り方について（研究課題）
(d)実連
・実連の審判員のアフターケアが必要である。
③ルール研究委員会報告
(a)ルールブック　２月下旬には出来る。
④日本リーグ審判委員会報告
(a)日本リーグ審判員の研修は２年に１度から毎年に変更する。
(b)日本リーグ・プレーオフの際、クロアチアレフェリーによる講習会を開催。
(c)日本リーグに突然のアクシデントで試合にこれない場合があるが、その場合、控え審判を用意する準備はない。
⑤審判総務委員会報告

2　JHAコーチ・レフェリー・シンポジューム

スタイン・バッハ（IHF／PRC委員長）の講演の中で、段階罰の取り方についての質問があり、そのことについて見解をまとめておく。

段階的罰則をどのように取るかは、ルール８：13とルールの解説に従って、段階罰に相当するファールがあればイエローカードを適切に使いゲームをコントロールしてもらいたい。但し、どのような方法でイエローカードを使うかは、レフェリーが決めるものである。

3　IHFヘッドレフェリー・シンポジューム

期　日　６月13日～18日
場　所　オーストリア・リンダブルン
参加者　斎藤　実・後藤　登
(a)ニュールールに関するさまざまな討議。
(b)若手レフェリーの育成についてのアイデア。

4　競技規則改正に伴う中央研修会開催について

期　日　１月25日(日)13時～17時
場　所　国立オリンピック青少年総合センター
参加者　各都道府県協会審判長、日本リーグ・実連・学連関係者

5　トップ・レフェリー強化研修会

期　日　２月７日～８日
場　所　大同特殊鋼体育館（ナショナル男子をモデルに）
参加者　国際審判員・各ブロックより１ペア参加

【審議事項】

1　平成10年度審判委員会事業および予算

2　平成10年度全日本大会審判員割り当て

全日本大会審判員候補者名簿は３月20日必着。

3　平成10年度上級審査会

◎Ａ級（本年は１会場）
　Ａ審査会（16名）
　場所　福島県・石川町（全日本教職員大会）
◎Ｂ級
・北地区（11名）
　場所　東北（東北学生春季リーグ）
・東地区（17名）
　場所　東京（関東クラブ選手権）
・中地区Ⅰ（13名）
　場所　名古屋（東海学生新人戦）
・中地区Ⅱ（15名）
　場所　未定（関西学生新人戦orジャパンオープン東海予選）
・西地区（17名）
　場所　熊本

4　平成10年度全日本大会審判員評価と指導

⑴全日本高校選手権大会審判員評価
　場所　徳島県徳島市
⑵全日本総合選手権大会審判員評価
　場所　神戸グリーンアリーナ

5　JHAレフェリーコース

◎前期・期日　８月７日～９日
　場所　山梨県甲府市（デューペー杯予定）
◎後期・期日　平成11年３月下旬
　場所　岡崎市（岡崎杯予定）

6　平成10・11年度公認審判員登録更新

提出　５月31日必着

実連レフェリーコースの認定者で都道府県協会に登録しないものがある。

7　競技規則改正点とその対応策

8　その他

⑴全日本大会における立会人について

競技委員会で協議されるが、それまではIHFの立会人の任務に準じて行ってほしい。

⑵若手審判員の育成

将来的に国際審判員を養成しなければならないが、ペアの両方とも公式用語をしゃべることが条件である。

日本の全国の中から特に語学の出来る者を選び、英才教育をする必要がある。

⑶平成10年度高体連・中体連の競技規則と競技時間について
　高体連
　・徳島インターハイ・大阪選抜大会
　競技時間…ニュールール
　競技時間…25－10－25（平成９年度と同じで実施）
　中体連
　・全国中学（仙台）
　競技時間…ニュールールで実施（但し、７ｍスローの際のタイムアウトは実施しない）
　競技時間…20－10－20（平成９年度と同じで実施）
　・JOCカップ・ジュニア・オリンピック
　開催県大阪とニュールールで実施の方向で検討中。

簡易ハンドボール指導の実践報告

「ハンドボールにつながるゲーム（ミニハンドボール）の指導実践について」（5年生）

愛知県名古屋市立西城小学校
筒井　孝行

1　パスを回して攻撃する：小学校におけるゲームの指導の中で、「だんご状態」になることがよくある。この時、体力的に優位等の理由でチームの中心になる児童の能力は向上するが、それ以外の児童の能力の向上は乏しい。また、ゲームを楽しむことは難しい。「だんご状態」になる原因は、a投げる・捕る（蹴る・止める）といったボール扱いが未熟なため、b空いているところ（オープンスペース）へ動くことができないため、c空いている（フリー）人を探せないため、と考える。この3つを克服すれば「だんご状態」を回避し、パスを回して攻撃できるのではないか。さらに、友達と協力してゲームを楽しみ、チームで攻め方・守り方を工夫できるのではないかと考え「ミニハンドボール」の実践を行った。

2　「ミニハンドボール」のルール

：aコート（図1参照）：サッカーのミニゲーム練習用のゴールを使用（高さ1m×横2m）。軽量で準備が簡単。高さが1mしかないためGKへの顔面シュートの危険が少なく、女子でもGKをやることに恐怖心が少ない。b人数：1チーム4人（男子2名、女子2名）。c得点：ゴールに投げ入れたら1点。ゴールにボールが入ったときチームの全員が相手側のコートに入っていなくてはならない。

3　3つの原因を克服するための工夫：aを克服するために、(1)扱いやすい小さいボールを使う（小学生用ハンドボール）(2)ゲームの合間にチーム練習の時間をとり、(a)正確にシュートを打たせる(b)DFを1人ぬいてシュートを打つことをめざし、リードアップゲームをさせる（図2参照）。bを克服するために、(1)1チームの人数を少なくしてオープンスペースを広げる。cを克服するために、(1)味方を探せるよう顔を上げさせ、ボールを持ったら3歩動くよう指導。パスによる攻撃を重視し、ドリブルはワンドリブルまでとする。(2)ゴール時に全員がセンターラインより上がるルールにより、GKも攻撃に参加させ、常に4人対3人で攻撃側に数値優位を与える。あわてず落ち着いてパスさせることをねらう。

4　指導計画（表1参照）

5　実践結果：a個人技術(1)リードアップゲームによる技術の向上、チームの少人数化、攻撃側の数的優位により、誰もがゴールを決めることができた。(2)リードアップゲームによる成果(a)ジャンプシュートができるようになった（男子8／18、女子0／18）(b)フェイントを入れてDF1人を抜き、シュートを打つことができるようになった（男子8／18、女子3／18）bチーム戦術(1)チーム内で役割分担ができるようになった(a)守備＜GK、右、センター、左＞(b)攻撃＜右、センター、ポスト、左＞(2)第2時の頃、能力の高い男子2名でパスを回していたが、攻めきれないことが多く、第5時には男女4人でボールを回しゴールを狙う姿がみられた。

図1

(a)正確にシュートをうつゲーム
(チーム対抗で3分間に何回コーンをたおせるか競う)

(b)DFを一人ぬいてシュートをうつゲーム
(チーム対抗で3分間に何回コーンをたおせるか競う)

図2

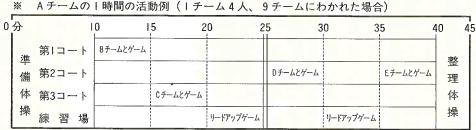
表1

第1次　　ゲームのルールを知る。……………………　第1時
第2次　　ゲームと練習を繰り返す。…………　第2時～第5時

※　Aチームの1時間の活動例（1チーム4人、9チームにわかれた場合）

0分–10		10–15	15–20	20–25	25–30	30–35	35–40	40–45
準備体操	第1コート	Bチームとゲーム						整理体操
	第2コート				Dチームとゲーム		Eチームとゲーム	
	第3コート		Cチームとゲーム					
	練習場			リードアップゲーム		リードアップゲーム		

第3次　　トーナメント戦を行う。……………………　第6時

世界選手権に向けての全日本代表選手の体重増加策について

高橋勝美（神奈川工科大学）
久木文子（星薬科大学）
西山逸成（日本ハンドボール協会スポーツ医・科学委員長）

'97世界選手権に向けて

日本ハンドボール協会は、1997年5月に熊本で行われた「1997年男子世界ハンドボール選手権大会」に向けて、初めて外国人監督としてオーレ・オルソン氏を招聘した。オルソン新監督は、新生日本代表チームは外国人選手に走り負けない体力、当たり負けない身体づくりを目指し、選手に体力トレーニングプログラムと栄養プログラムを与えた。なかでも選手の身体づくりでは、攻撃および防御時にみられるコンタクトプレーの際、外国人選手に当たり負けないために体重増加策を行った。それは選手の1日のエネルギー摂取量を、体重1kg当たり60kcalとし、1日6食の食事と練習中のエネルギー補給を積極的に行った。体重が増加した際の問題点は、増加した体重は脂肪量の増加によるものか筋肉量の増加によるものかである。一般的に、身体の脂肪量は体脂肪率、筋肉量は除脂肪体重によって表される。さらにスポーツ選手の体型は、ある競技のためのトレーニングを長年積むと、その競技の特性が体型にも現れてくる。そこでスポーツ医・科学委員会では、体重増加にともない身体のどの部分の筋肉あるいは脂肪が増加したのかを調べる形態班を設け、約1年間、皮下脂肪厚と筋肉厚の変化を追跡測定した。その結果を報告する。

測定内容

皮下脂肪厚および筋肉厚の測定は、超音波法（アロカ社製ＳＳＤ－５００）によって行った。図１には、超音波法によって測定した皮下脂肪厚および筋肉厚の測定部位を示している。測定部位は、身体の上肢（腕）3箇所、体幹（胴）4箇所、下肢（脚）4箇所の合計11箇所である。測定部位および皮下脂肪厚と筋肉厚の分析法は、先行研究と同様の抱負を用いた（1、2）。測定は、約1年間で3回行った。測定を行った時期と、その時の全日本チームのスケジュールについて示したのが図2である。1回目の測定は、1996年3月であり、全日本チームの合宿を行っている後期の時期であった。2回目の測定は、1996年8月であり、各代表選手がそれぞれに所属するチームに戻ってトレーニングをしている時期であった。3回目の測定は、1996年11月であり、この時期は日本リーグが終了し、それぞれが所属するチームでトレーニングを行っていた時期であった。

被験者は、測定に参加した代表選手全てを対象として行っているが、1年間の変化を調べるために、3回の測定全てに参加した12名の選手の結果を分析した。

体重・体脂肪率・除脂肪体重の変化

図3は、約1年間の体重、体脂肪率そして除脂肪体重の変化である。分析の対象となった12名の選手の体重は、3月から11月にかけて3kgの増加を示した。身体に含まれる脂肪量を表す体脂肪率は、約1年間で0・9%の増加を示し、脂肪の増加は1・3kgというわずかな増加であった。筋肉量を表す除脂肪体重は、約1年間で6・8kgの増加を示し、この変化は統計的にも有意な増加であった。体重の増加分と脂肪量や除脂肪体重の増加分とが一致していないのは、体脂肪率と除脂肪体重の推定法(3)が、測定した11箇所の部位の内、特定の3箇所の部位の値を用いて算出しているために、推定に用いた部位の変化の度合いが算出値に影響を及ぼしているためである。このように脂肪と筋肉の変化を、身体

（前）　（後）

1：前腕前部　2：上腕前部　3：上腕後部　4：胸　部
5：腹　部　6：固有背筋部　7：肩甲骨下部
8：大腿前部　9：大腿後部　10：下腿前部　11：下腿後部

図１　皮下脂肪厚および筋肉厚の測定部位

1回目　2回目　3回目
3　4　5　6　7　8　9　10　11

全日本合宿
遠征
親善試合（対ドイツ）
日本リーグ
各チームでのトレーニング

図２　全日本代表選手の1996年のスケジュール

全体として捉えれば、体重増加は筋肉量の増加によるものであり望ましい結果といえる。しかしはじめにも述べたように、ある特定のスポーツ競技のトレーニングを積むと、その競技の特性が「体つき」にも現れる。そこで皮下脂肪や筋肉の付き方が約1年間でどのように変化したかを調べる必要があった。

皮下脂肪厚および筋肉厚の変化

図4には、約1年間の皮下脂肪厚と筋肉厚の変化を平均値と標準偏差で示した。皮下脂肪厚の変化の特徴は、上肢や下肢といった、運動・動作を行う部位では変化がみられなかった。しかしながら普段から動きが少ない体幹の部位では皮下脂肪厚の増加がみられた。最も多く皮下脂肪がついている部位は腹部であり、この部位は約1年間で3㎜（増加率31・7％）の増加を示した。次いで大きな値を示した部位は固有背筋部の肩甲骨下部であり、これらの部位の変化はそれぞれ1㎜（増加率19・0％）と2㎜（増加率21・1％）であった。胸部でも、1㎜（増加率12・2％）の増加を示していた。一方、筋肉厚の変化の特徴は、約1年間を通して上肢と体幹の胸部を除いた部位そして下肢の大腿前部と下腿前部の部位では大きな変化がみられなかったが、投・走・躍動作に大きく関与する胸部、大腿後部そして下腿後部の部位においては増加傾向がみられた。3月から11月にかけての変化は、胸部で4㎜（増加率18・9％）、大腿後部で11㎜（増加率15・3％）、下腿後部で18㎜（増加率27・8％）であった。

図5には11月の測定データから求めた変動係数の結果を示した。変動係数とは、標準偏差を平均値で除し百分率で表すことで、測定部位の個人差の程度を知ることができる。この結果からみると筋肉厚よりも皮下脂肪厚で個人差が大きく、特に腹部、大腿前・後部、上腕後部、下腿後部で変動係数が大きく体重が増えることで脂肪の付き方に選手による差が大きい部位といえる。筋肉厚ではどの部位でも大きな差はなく、体重増加による筋肉の増え方に選手による差は小さいことになる。

図3　3回の測定における体重、体脂肪率、除脂肪体重の変化

図4　3回の測定における皮下脂肪厚および筋肉厚の変化

図5　97年11月測定データによる皮下脂肪厚および筋肉厚の変動係数

体重増加策は成功した

12名の選手では11月の段階では3kgの体重増加であったが、世界選手権当時では、全日本チーム全体では約10kgの体重増加がみられた。今までの結果から考えれば、日本のハンドボール選手のトップクラスの選手といえども体重を増加させることは、特に体幹の部位の皮下脂肪が付いてしまい、またそれらの部位は、脂肪の付き方の度合いに選手個々人の差が大きい部位であった。しかし、今回の体重の増加は主に筋肉量の増加によるものと推測できる。その中でも特に下肢の部位の筋肉量の増加が大きかった。筋肉量の増加は、トレーニングによって得られるものである。オルソン監督は、ただエネルギー摂取量を増やすだけでなく、選手に多くのトレーニングプログラム（ウエイト、スプリント、ジャンプトレーニング、エアロビックトレーニングなど）を与えた。選手が世界選手権に向けて、与えられたトレーニングと栄養摂取のプログラムを確実に遂行したことにより、望ましい体重増加が得られたのだろう。オルソン監督の体重増加策は成功したといえるだろう。

●カタールのインターコンチネンタル・カップ

IHFの援助のもと、カタール協会は男子ナショナルチーム対象の、第1回インターコンチネンタルカップを、首都ドーハで6月7～12日に開催する。アジア、アフリカ、ヨーロッパ、全米の現在のチャンピオンチームに参加資格がある。開催国も参加する。アフリカとアジア代表は既にアルジェリアとクウェートにそれぞれ決定しているが、EHFの代表はイタリアでのヨーロパ選手権で決定する。全米代表はまだ発表されていない。大会上位3チームには開催者から総額10万米ドルの賞金が与えられる。

●1997年ハンドボール・プレイヤーズ・オブ・ジ・イヤー

【男子】
Talent Duishebaev（スペイン、ディフェンディング・タイトルホルダー）
Joszef Eles（ハンガリー）
Valdimar Grimsson（アイスランド、右コーナーアタックのスペシャリスト）
橋本行弘（世界選手権の自称スターキーパーたちの奮闘を打ち砕いた日本のゴールキーパー）
Vassili Kudinow（ロシア、ディフェンスプレイヤー）
Staffan Olsson（スウェーデン、世界選手権第2位）
Carlos Reinaldo（キューバのディフェンスオールラウンダー）
Stephane Stoecklin（フランス、ダイナミックなレフトハンダー）
Kyung-shin Yoon（韓国のゴールスコアラー）
【女子】
Natalia Deriougina（ロシア）
Michaela Erler（ドイツ）
Marie-Ange Gogbe（コートジボワール）
Sun-Hee Han（韓国）
Indira Kastratovic（マケドニア）
Natasa Kolega（クロアチア）
Susanne Munk Lauritsen（デンマーク）
Helga Nemeth（ハンガリー）
Tonje Sagstuen（ノルウェー）

スーパースターの中のスーパースターは誰か？

WHMの編集スタッフは1997年世界ハンドボールプレイヤーオブジイヤーの読者投票に先立ち、過去12か月にわたり国際的レベルで注目された上記の男女各々9名を選出した。読者はこのリスト外の選手にも投票できるが、1997年の各世界選手権で活躍した選手のみが対象である。スポーツメーカーのアディダスから賞が贈られる。

※投票の〆切は4月1日まで
　インターネットおよび事務取扱責任者会議で呼びかけた

●大会のお知らせ
①ポルトガル国際ハンドボール大会

ポルトガルのアルコシエッテにて、アルコシエッテ・カップ'98が、7月11日～7月15日に開催されます。アルコシエッテは、温暖な気候に恵まれた文化と歴史あふれる美しい海辺の町です。もちろん地元の料理も自慢です。

カテゴリーは、以下の通り。

	男子(生年)	女子(生年)
シニア部門	1977年以前	1979年以前
ジュニア部門	1978、79、80年	――――――
青年部門	1981、82年	1980、1981年
新人部門	1983、1984年	1982、1983年
少年少女部門	1985、86、87年	1984、85、86年

・参加登録期限は、1998年5月31日です。

②第6回ヨーロッパハンドボールフェスティバル

スロベニア・コースト　1998年7月7日～11日

スロベニアのハンドボールは、ヨーロッパの実質上トップに近づきつつあることをすでにお聞きと思います。ヨーロッパのハンドボールの祭典であるユーロフェストは、前回の7月上旬の大会で5回目となりました。第5回大会には、オーストリア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ベルギー、クロアチア、チェコ、デンマーク、ハンガリー、イタリア、モルドバ、ポーランド、スロバキア、スロベニア、台湾の13カ国から104チームが参加し、若いハンドボール選手の最大の交流の場となりました。

今回のユーロフェスト大会は、1998年7月7日～11日に開催されます。過去5回の1回1回は高レベルで戦われ、数カ国からの若いナショナルチームも参加しました。今年の大会を若いナショナル選抜チームのための特別カテゴリーにしたいのもそのためです。
(大会参加の依頼文より)
・参加登録期限は1998年5月20日です。

※詳しくは日本ハンドボール協会までお問い合わせ下さい。

IHFニュース

●ＩＨＦポイントランキング　デンマークが首位の座を確保、ドイツアップ、ハンガリー後退

ドイツでの女子世界選手権の優勝により、世界連盟の競技の終了後常に更新される最新ＩＨＦポイントランキングでデンマークが首位の座をさらに強固にした。スカンジナビア諸国がトルコ（男子ジュニアWC）とコートジヴォワール（女子ジュニアWC）で好成績を残し、ハンドボール競技国の記録ランキングをリードした。ランクの中間部にのみ変動があった。ドイツは女子世界選手権の銅メダル獲得でアップし、ハンガリーは後退した。　ＩＨＦポイントランキングは、世界選手権及びオリンピック大会に基づき、上位12カ国がリストアップされている。次回の選手権が1999年春まで開催されないため、デンマークは１年以上ハンドボール世界一の国とみなされることになる。ランキングは以下のとおり。

順位	国名（旧順位）	ポイント
1.	デンマーク（1）	48
2.	ロシア（2）	42
3.	フランス（3）	36
4.	韓国（3）	28
5.	ノルウエー（6）	26
6.	ドイツ（9）	25
7.	スペイン（6）	24
8.	クロアチア（11）	23
9.	ハンガリー（5）	22
	スウェーデン（6）	22
11.	エジプト（10）	21
12.	ポーランド（—）	14

●第17回通常総会　於コートジヴォワール

ＩＨＦは第17回通常総会を本年９月16日－20日までコートジヴォワールのヤムスクロで開催する。代表者は1990年に創設されたユネスコ会議センターに属するビルである、Fondation Houphouet-Boignyに招集される。処理されるべき議事項目の20点の中の一つは、2001年の４つの世界選手権（男子、女子、男女ジュニア）の割り当てである。

総会の開会に先立ち、ＩＨＦ各組織及び大陸協会が個々の会合を招集する。４日間の日程は以下のとおり。

９月16日(水)　午前　評議会会議、午後各委員会会議及び大陸連盟のセッション

17日(木)　午後　ＩＨＦ総会公式開会

18日(金)　ＩＨＦ総会

19日(土)　ＩＨＦ総会

トップレフェリー

1997／98シーズンにＩＨＦのＰＲＣが発表したトップレフェリーのリストに、23カ国の23組のレフェリーがリストアップされている。リストアップされた審判は以下のとおり。

ＡＵＴ　Wille-Vorderleitner
ＢＵＬ　Ivantchecv-Georgiev
ＣＧＯ　Mabounda-Mvoula
ＣＲＯ　Mladinic-Vujnovic
ＣＵＢ　Poumier-Valdes
ＣＺＥ　Dolejs-Kohout
ＤＥＮ　Boye-Jensen
ＥＳＰ　Gallego-Lamas
ＦＲＡ　Garcia-Moreno
ＧＥＲ　Bulow-Lubker
ＧＲＥ　Migas-Bavas
ＩＳＬ　Arnaldsson-Erlingsson
ＩＴＡ　Masi-Di-Piero
ＫＯＲ　Chung-Lim
ＫＵＷ　Al Holi-Al E'Nezi
ＬＡＴ　Yashkin-Kazinieks
ＭＫＤ　Nachevski-Nachevski
ＮＯＲ　Oie-Hogsnes
ＲＵＳ　Danelia-Kiselev
ＳＬＯ　Kalin-Koric
ＳＵＩ　Burgi-Heutschi
ＵＫＲ　Fegir-Stegura
ＵＳＡ　Anusic-Bojsen

候補レフェリー

同時にＰＲＣは、予測できる将来のトップリストに含まれそうな、24組のレフェリーをノミネートした。候補者は以下のとおり。

ＡＬＧ　Boutaghane-Tacine
ＡＲＧ　Malik de Tchara-Alonso
ＢＥＬ　Rosskamp-Rothkranz
ＢＲＡ　Silva-Righeto
ＣＨＮ　Li-Li
ＣＩＶ　Doumbia-Gbela
ＥＧＹ　Merghany-Tawfik-Hassan
ＥＳＰ　Breto-Huelin
ＦＲＡ　Bord-Buy
ＧＥＲ　Lemme-Ullrich
ＨＵＮ　Klucso-Lekrinszki
ＫＳＡ　Al Heed-Al Waneen
ＮＥＤ　Scholten-Stolk
ＮＯＲ　Forbord-Jorstad
ＰＯＬ　Solodko-Solodko
ＰＯＲ　Goulao-Nacau
ＱＡＴ　Al-Mulla-Alzaraa
ＲＯＭ　Plesa-Pripas
ＲＵＳ　Litvinov-Khudoerko
ＳＥＮ　Seye-Mbengue
ＳＬＯ　Repensek-Pozeznik
ＳＶＫ　Rancik-Beno
ＳＷＥ　Hakansson-Nilsson
ＵＲＵ　Romero-Gonzales

日本協会ホームページの紹介

インターネット専門委員会副委員長　出原　理

日本協会では、ハンドボールの広報を目的に、昨年11月より、インターネット上にホームページ（以下、HPと略記）を開設し、情報発信を開始しました。発信内容については、今後さらに充実させていく予定ですが、ここでは、現在までに発信しているHPの内容を紹介したいと思います。

◇HP発信の経緯と目的

これまで、日本協会からの一般に対する情報伝達の手段は、唯一機関誌により行われてきました。しかしながら、機関誌の購読者は、賛助会員、協会登録チームに限られていることから、必ずしも情報を欲している人すべてに情報が伝達されていたとは言えない状況でした。そのため、日本協会の公式情報を広くかつ迅速に発信することを目的として、日本協会に新たにインターネット専門委員会を設置し、HPを用いた情報発信の準備を進めてきました。そして、昨年９月に日本協会独自のドメインを取得、同時に協会専用のサーバを設置し、11月からHP発信に至っています。ここで言うドメインとは、インターネット上の住所に相当するもので、誰もがわかる名前ということで、〝handball.or.jp〞という名前としました。文末に、日本協会と日本リーグのホームページのアクセス先を示しますが、これらのHPで協会主催大会の情報を網羅することができるようになりましたので、ぜひアクセスしていただきたいと思います。

◇現在の発信内容

現在（98年３月）のメニューは、以下のとおりです。

①大会情報……協会主催大会の日程、組合せ、会場案内、試合結果等の情報を発信しています。特に試合結果については、試合のあった日に即日アップする体制を整えていますので、新聞等で報道されない試合についても情報を入手することが可能となりました。これまでに、全日本総合、JOCジュニアオリンピックカップ、実業団チャンレンジ'98の結果を即日アップしております。また、昨年12月の世界女子選手権についても、同様にほぼリアルタイムでの結果発信を行いました。

②全日本情報……ナショナルチームのメンバーや強化スケジュール、出場大会の情報（日程、組合せ、試合結果）を発信しています。

③日本協会……協会の概要、組織図、日本ハンドボール年表、事業日程、事務局所在地について発信しています。

④フォトギャラリー……協会主催大会での試合の写真を画像でアップしています。これまで、なみはや国体、インカレ、全日本総合の写真をアップしています。

⑤協会からのお知らせ……上記以外の協会からの情報を、お知らせとして掲載しています。

⑥新着情報……HP更新内容の履歴を記録したページです。新たに更新したページがわかりますので、常にチェックしておくと便利です。

◇現在までのアクセス状況

昨年11月の発信から本年２月までの４ヶ月間のアクセス数は、アクセスログによると、3750で（１日平均31人程度、ちなみに、表紙のページに設置したアクセスカウンター（11月20日設置）では、2700となっています）、ハンドボール関係の企業や大学など400以上の組織からアクセスがありました。アクセス数は、大会など試合のあるときが多く、昨年12月の全日本総合男子開催時期が最も多い結果となっています。また、曜日別では月曜日が最も多く、時間別では昼休みのアクセスが多いことから、職場や学校からアクセスしている人が多いことがうかがわれます。

◇今後の展開

日本におけるここ１、２年のインターネット環境の普及はめざましく、会社、学校などでは、誰もが簡単に接続できる環境になりつつあります。今後は、更に家庭にまで普及してくるものと考えられ、HPでの情報発信はより重要度を増してくるものと考えられます。日本協会としては、今後ともHP発信内容の充実を図り、将来的には、都道府県協会・加盟団体との連絡、登録、講習などにもHPを発展させていきたいと考えています。

以上、日本協会HPについて紹介してきましたが、試合結果などを迅速に情報発信するためには、関係者（都道府県協会、各連盟、会場運営者等）の方々の協力が不可欠です。これまで以上のご理解とご協力をお願い申しあげます。

※ホームページのアクセス先（URL）

日本協会ホームページ
http://www.handball.or.jp/
日本リーグホームページ
http://www.jhl.handball.or.jp/

[お知らせ]

■平成10年度ハンドボール競技規則の販売について
B6版 70ページ
価格 1,200円
発売時期平成10年３月31日
申し込み先　(財)日本ハンドボール協会

■財団法人日本ハンドボール協会「60周年記念誌」の発行について
財団法人日本ハンドボール協会の「60周年記念誌」が間もなく出来上がります。「50周年記念誌」発行以後10年間の〝日本ハンドボール界の歩み〞をまとめたものです。ぜひご一読ください。
※詳細につきましては日本協会までお問い合わせください。☎03-3481-2361

CONTENTS　4月号

柔らかな感触で、最適なバウンド！

PKCH3-AD DX
5,500円

PKCH2-AD DX
5,400円

PKCH1-ADJ
3,600円

手縫い・国際公認球

PKCH3-AD
4,600円

PKCH2-AD
4,500円

PKCH3-ADR
2,800円

PKCH2-ADR
2,700円

（財）日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第三八四号
昭和四十年六月七日　第三種郵便物認可
平成十年三月二十六日印刷　平成十年四月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話　代表　三四八一－二三六一
振替　〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人　市原則之
価格は登録金に含む